特255
620

建國の肇に還れ

澤近徳彌 著

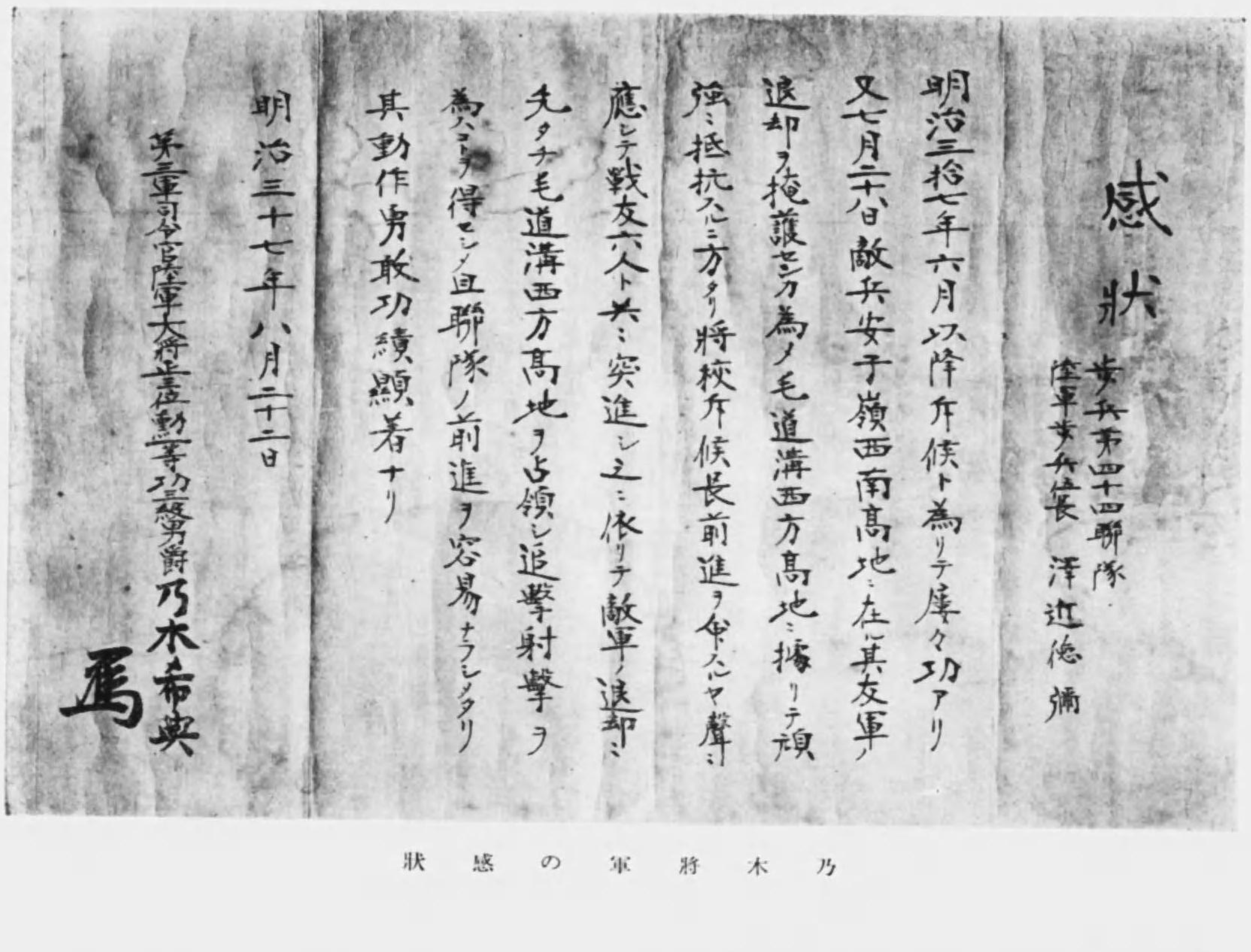
始

特255
620

帝國圖書館藏

建國の肇に還れ

出征當時の著者と
最近の面影



感狀

步兵第四十四聯隊
陸軍步兵伍長　澤近德彌

明治三拾七年六月以降斥候ト爲リテ屢々功アリ
又七月二十八日敵兵安子嶺西南高地ニ在ル其友軍ノ
退却ヲ掩護セシカ爲メ毛道溝西方高地ニ據リテ頑
強ニ抵抗スルニ方タリ將校斥候長前進ヲ命スルヤ聲ニ
應シテ戰友六人ト共ニ突進シ之ニ依リテ敵軍ノ退却ニ
先タチ毛道溝西方高地ヲ占領シ追擊射擊ヲ
爲スコトヲ得セシメ且聯隊ノ前進ヲ容易ナラシメタリ
其動作勇敢功績顯著ナリ

明治三十七年八月二十二日

第三軍司令官陸軍大將正三位勳一等功三級男爵乃木希典

乃木將軍の感狀

忠烈

佐賀市長 横尾敬義

横尾佐賀市長書

第十二師團長 香月中將書

前第六師團長 坂本中將書

橫尾佐賀市長書

壯烈鬼神泣

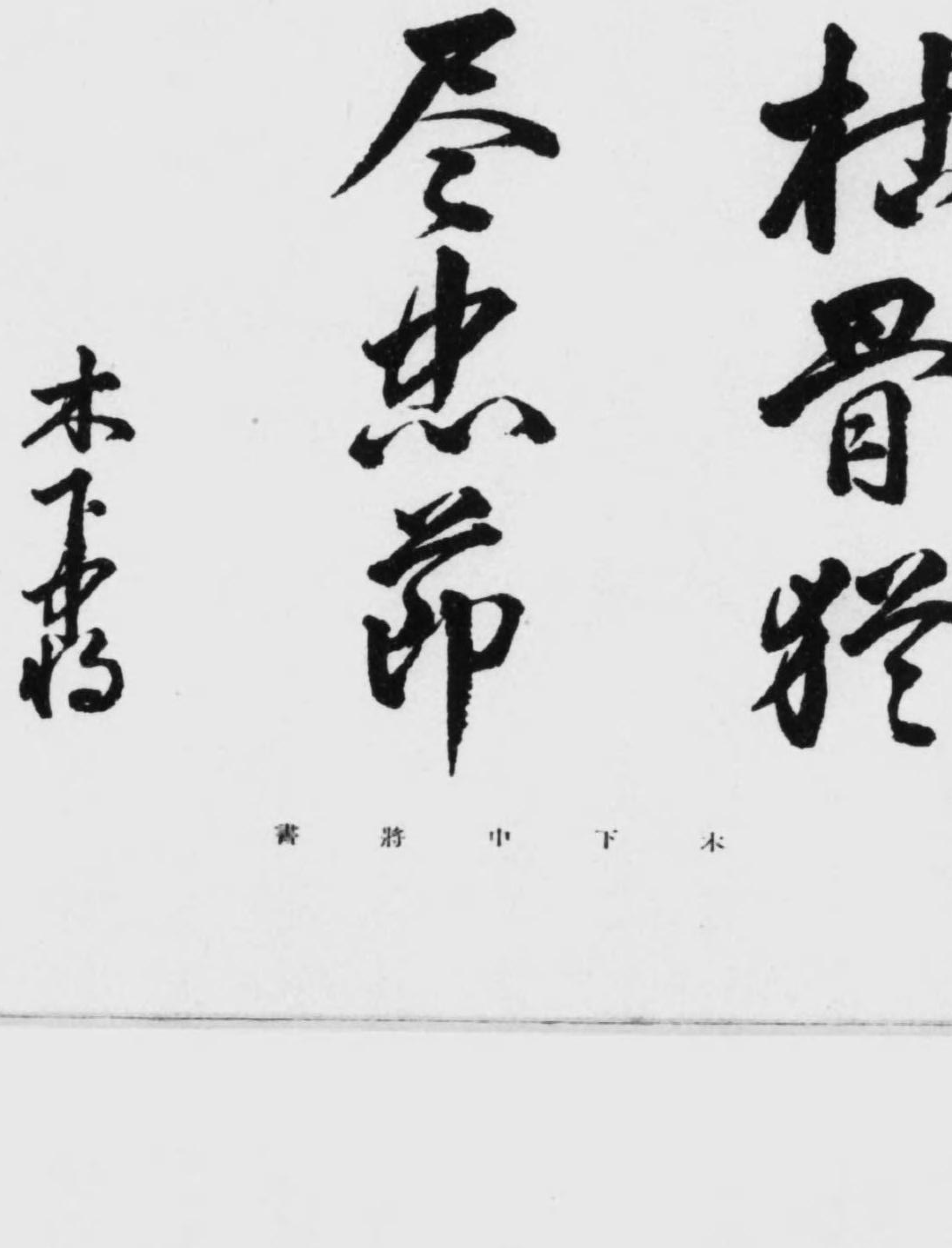
靜夫書

古川佐賀縣知事書

神通之力

護國道場 僧正 日淳

日蓮上人護國會監
主監僧正日淳書



木下中將書

義勇奉公

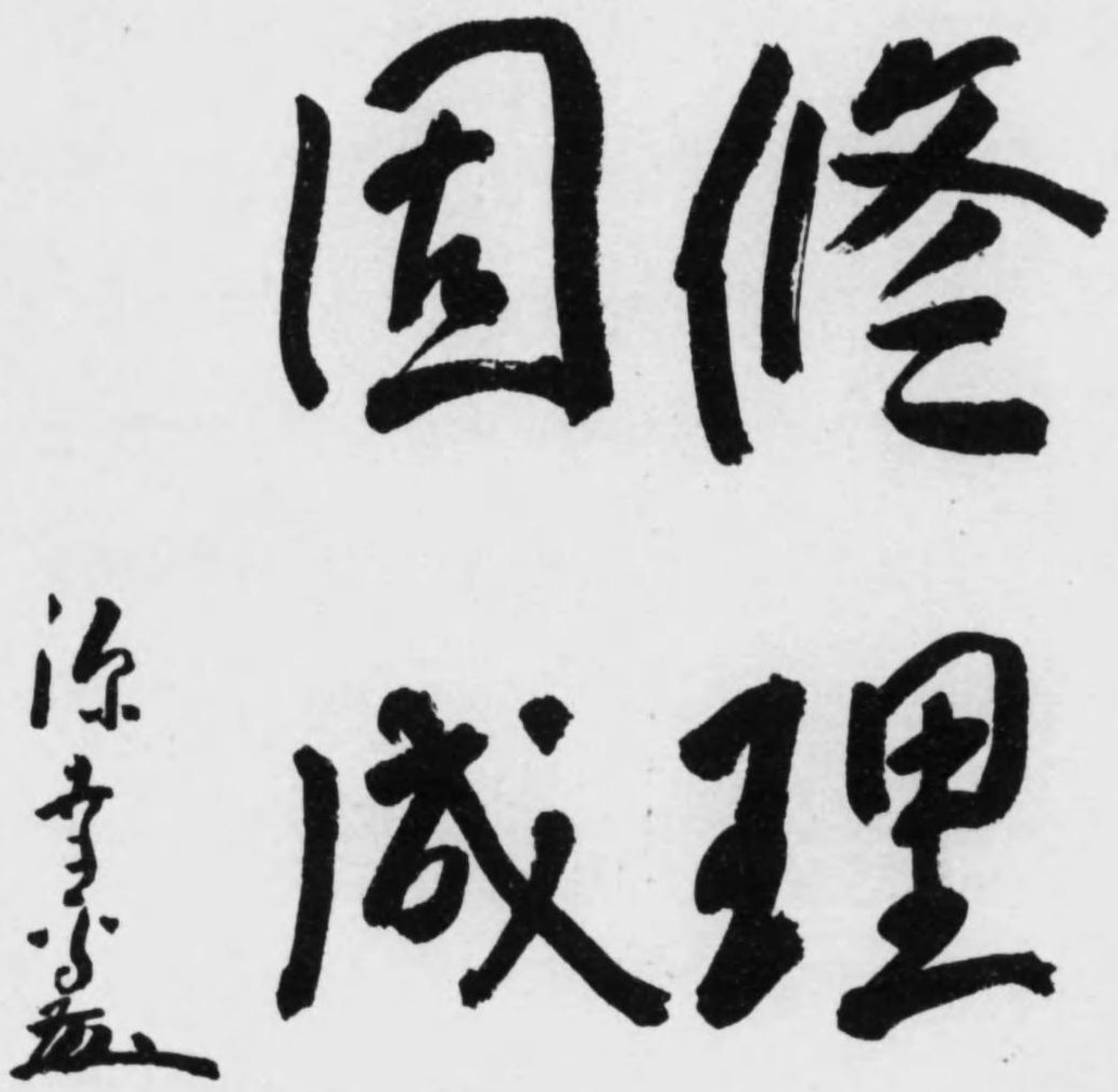
佐賀地方裁判所

検事正　國分丸治

國分検事正書

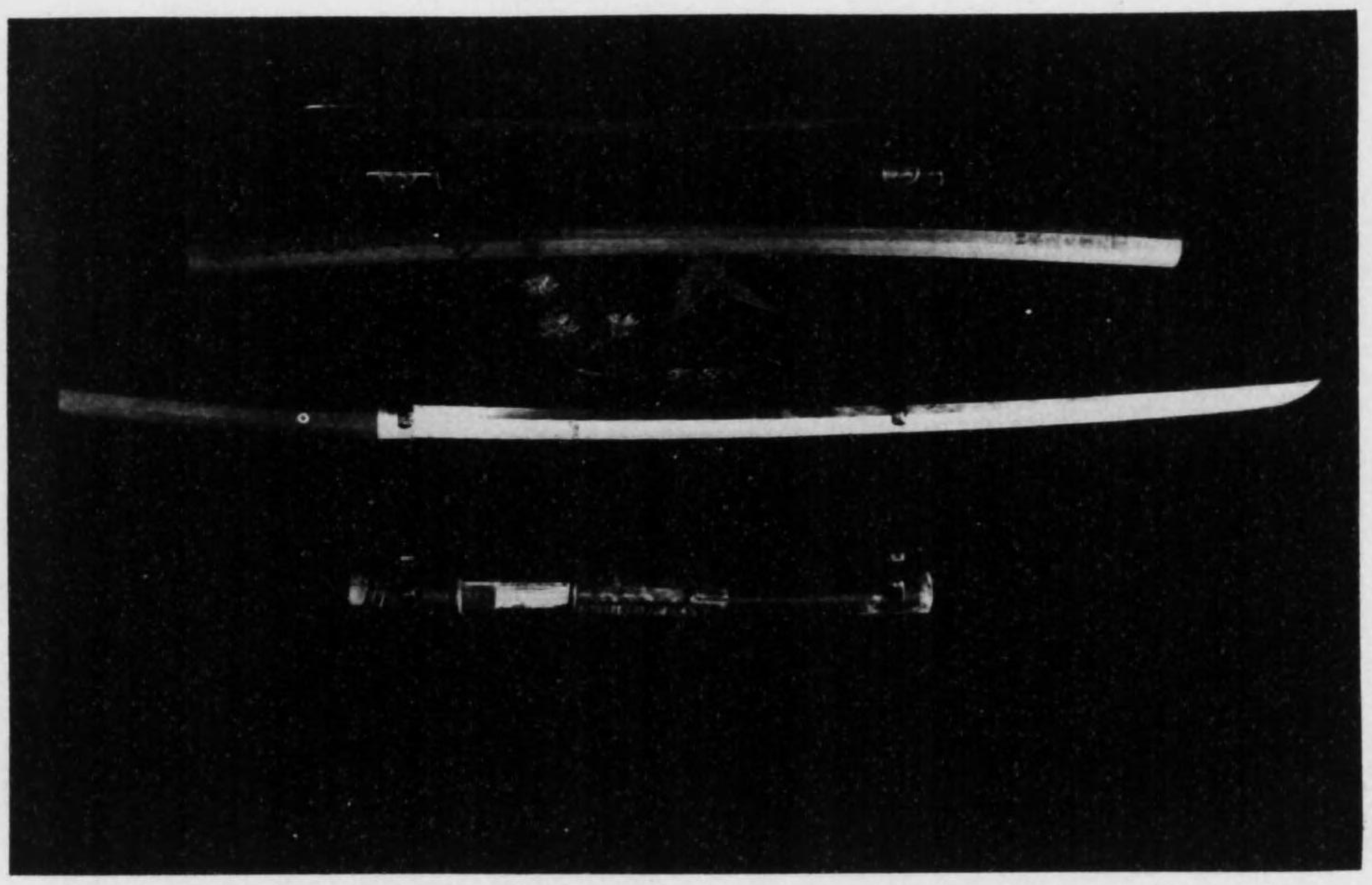
佐賀縣橘井經濟部長書

佐賀書道會長 德廣大佐書



佐嘉神社 後藤宮司書

裏面說明參照



賞詞

步兵第四十四聯隊第十一中隊
陸軍步兵伍長　澤　近　德　彌

明治三十七年八月二十一日所屬隊旅順要塞Q堡壘ヲ突擊スルニ當リ伍長ハ外數名ト共ニ撰拔隊ニ加リ通路開設ノ任ヲ帶ビ工兵撰拔兵ト協力シ猛烈ナル敵銃砲火ノ下ニ在テ堡壘直前ニ在ル副防禦ノ破壞ニ從事シ身ニ負傷セシニモ關ハラス猶屈セス奮然力行其目的ヲ遂ゲ以テ突擊大隊ノ前進ヲ容易ナラシメタリ其動作勇敢ニシテ功績著大ナリト認ム

仍テ賞詞ヲ授與ス

明治三十七年九月十日

第十一師團長
陸軍中將　正四位勳二等功四級　土　屋　光　春

寫眞說明

我寫眞の短刀は明治十年の役に薩南の健兒から熊本城を包圍された時、皇軍を統率してゐた歷史的に有名な谷干城將軍の秘藏の愛刀で、其後將軍は、野に下り郷里高知縣で余生を送つてゐたが、時偶々日露の風雲急を告げ、丸龜聯隊が出征の際、同聯隊を訪れて出征の勇士達を前に『この聯隊から戰場に於て最初に「殊勳甲」の功を立てた者に余が熊本籠城の砌りに肌身放さず所持してゐた守り刀〝四谷正宗〟の稱ある名刀を與へる』と云つて志氣を鼓舞した。かくて著者は出征して名譽の負傷、第三軍司令官乃木大將より歩兵第四十四聯隊最初の殊勳者として別紙の感狀を得たので、著者は再出征を前に谷將軍を訪れ『殊勳甲の私に閣下御約束の短刀を下さい』と云つてもらつた由緒のある短刀である。著者は再度の出征より澤近家寶物の備前秀光の鍛えたる名刀と共に所持して出征し再三決死隊に選はれた際等は護身用として携帯し多數の敵兵を突き刺した衛物である。短刀を鍛えた刀匠は、新々刀界の巨匠として知られてゐる「清麿」の代表的作品で清麿は文化十年信州小諸領赤岩村の郷士山浦治右衛門信風の二男に生れ十七、八才の頃江戸に出で刀鍛冶となり相模を學んだが當時の勤王家佐久間象山等と親交があり刀匠中の勤王家として知られてゐた。短刀は清麿二十七才の作で谷將軍の嚴父は、清麿の名を慕ひ江戸に上り三ヶ年を待ちく漸にして清麿快心の大小を得て歸國したと谷將軍は語つてゐたが、清麿の刀は現在非常に稀で、愛刀に珍重がられてゐる。鍛法は相模を學んでその奥儀を極めたので、後の人は「四谷正宗」と稱してその作柄、刀の品位は愛刀家等しく認める處で清麿は四十二才で安政三年十一月十四日江戸四谷に歿した。

大刀は著者澤近家の家寶として傳へられたお家重代の名刀で後醍醐天皇笠置を落ちさせ給ひ隱岐國へ遷され給ふ由を聞き兒島高德等が義兵を擧げて天皇を迎へ奉らんとしたが果さず、遂に隱岐の國に警固され給ひ、一ノ宮尊良親王は尊澄法親王と共に兒島高德の舍弟兒島五郎備光を警衞の頭として土佐國神島に御安住あらせられたが時を經ずして兩親王は讃岐國に參らせ給ふ時、不幸兒島五郎備光外二名の者は病氣の爲め役宿の止むなきに至れり親王は涙の中に斯の三人を神島に殘る事とし別れに際して御親及「備前長船助左衞門尉秀光」の長刀を御下賜されたが五郎備光の死後成宮神社として御親を安置し、現今では澤近家一族は、これを祖先として祀る寳眞の大刀備前秀光は澤近家の寶物として傳へられたもので著者出征の際これを護身用として携え戰場ではこの名刀で多數の敵を斃し倒したが名刀の冴えは刃こぼれ一つなくその偉容は尚完全に遺つてゐる　（編輯者記す）

序

澤近君ハ明治三十四年十二月歩兵第四十四聯隊ニ入隊ス予ハ其教官タリ又ハ小隊長トシテ久シク君ト起居ヲ共ニセシ故ヲ以テ交情頗ル厚シ君資性慧敏沈着ニシテ豪膽、溫和ニシテ同情心ニ富ミ且責任觀念極メテ旺盛ナリ

明治三十七年日露戰役出征ニ當リ聯隊ハ豪膽決死ノ士ヲ選ビ搜兵隊ヲ特設ス該隊ハ終始聯隊ノ先頭ニ挺進シテ死地ニ入リ敵情ヲ搜索シ或ハ機先ヲ制シテ敵ノ心膽ヲ奪ヒ以テ聯隊ノ戰鬪ヲ有利ナラシメタル等其功績頗ル顯著ナリ

君選バレテ搜兵隊ニ入リ常ニ身ヲ捨テヽ勇躍奮戰威名赫々トシテ人皆其忠勇豪膽ナルヲ嘆賞ス軍司令官ノ感狀ハ君カ偉勳ノ一端ヲ窺フニ足ルモノト謂フ可シ

右ノ感狀ハ軍司令官タル乃木將軍自署シテ授與セラレタルモノニシテ光榮極メナク君ノ偉勳ト共ニ永ク千載ニ傳フヘキモノナリ

昭和拾年一月二十七日誌ム

第六師團長

陸軍中將　坂本政右衞門

序

國民の總意によつて決然國際聯盟脫退を通告して、皇國日本の眞の姿を吾等の眼前に展開した。昨年の暮から所謂非常時の叫びが一段と濃厚に顯れて益々その氣分を深めて行く時、畏友澤近德彌君『建國の肇に還れ』との著を起草せられる。この著や實に日本人としての行くべき道を懇切叮寧に指導して居る。著者は元來文章家でも學者でもない。嘗て日露戰役に從軍拔群の武功を建て乃木將軍から感狀を授けられてその武勇を全軍に布告せられた勇士で、その盡忠報國の誠を一貫した精神の發露を卒直に書き著したもので以て今日の時代に國民座右の銘として推賞するに足る。

昭和拾年五月東京に大會を開催するや君の忠烈に對し萬場一致後援なす事を決議せり。依つて茲に本會を代表して序となす。

昭和十年盛夏

全國傷痍軍人聯合會長

谷　田　志　摩　生

序

意義深き昭和九年は、たゞならぬ空氣の中に暮れて、昭和拾年參月には國際聯盟離脫の効力發生、十二月には海軍々縮會議の決裂、然して昭和十一年にはソ聯第二次五ヶ年計劃の完成並に赤化攻勢の强化、更に列國の對日經濟封鎖的經濟戰爭等があり祖國日本の非常時は年月と共に、愈々暗黑の色を深め行くばかりである。

如何にして、この非常時を清算するか、他なし國民は須らく『建國の肇に還れ』而して日露大戰以前の國民の如く奮起せよ。

日淸戰役に於て數萬の英靈と神力に依り得たる遼東半島を還付した時畏れ多くも、明治天皇と共に國民は涙聲を呑む斷腸の思ひで在つた。此の涙に奮激し軍民一致緊張した祖國熱愛の炬火が國民の胸奥に燃えた。

此の緊張の中に日露の大戰は開かれた兵力と云ひ武器と云ひ其の貧弱さ御話にはならなかつた。然るに當時の國民は協力一致全員が肉彈を以つて戰つた。難攻不落の旅順要塞は陷落し、奉天を占領し世界に誇るバルチック艦隊は全滅し、遼東半島は勿論南滿洲全體の鐵道及附屬地軍事上特に重要なる安奉線迄も我國の權利となり鴨綠江には東洋一と誇るにたる鐵橋を架設し、朝鮮を合併し十年間の涙は一時に拭ひ欣喜に滿ちた。

引續き歐洲の大戰に依り南洋諸島は我が統治權下に歸し、日支事變勃發に端を發し玆に滿洲國は獨立し數限りなき欣びの中にも日淸戰役以降の義戰に於て護國の鬼と化せられし悲壯忠烈なる勇士、尊き犧牲者の心境を國民は忘れてはならぬ要は文化の武器よりも化學の戰術よりも日本精神である此の非常時に直面しての日本精神とは建國の肇めに於て神より授られし日本精神であり、此の持主こそ神の分身たる日本國民である。

卽ち神の授けし日本精神とは荒木大將の叫ぶ竹槍である。此の精神が非常時局國難打開の鍵であると信ず。

至誠奉公の誠を念ずべき使命を持つ國民は、須らく『建國の肇に還れ』と叫ぶ所以である幸にして本書が愛國心を反映することも有らば、著者の光榮にして感謝の誠意を表はし以て自序と爲す。

著者　澤近德彌　謹識

目次

天御中主神と萬物造化の靈德……一
建國の大國是と國民の使命……四
日本國民と皇室中心主義……六
我國民性と傳統的信仰の力……九
日本民族身心清淨法と心靈力……一一
强き信念と責任感念……一三
荒木大將の竹槍とは何か……一四
日本魂と三勇士の心境……一六
日露戰役出陣の觀兵式……二〇
出陣當日妻子の訣別……二二
我が軍の勇ましき乗船と捕虜の上陸……二三
御用船阿波丸船中の心境……二五
金州南山城の初陣……二六
最新式の武器を利用する敵の逆襲……二七
赤十字旗の偉大なる力……二八
小學兒童の叫ぶ萬歲……三〇
銃後に叫ぶ婦人の偉大なる力……三一
乃木將軍の軍裝檢査……三三
上下一致戰友愛至情の結晶……三四
敵に背を向けては死せず……三五
軍旗の尊嚴と勇氣百倍の突擊……三六
空閑神社の祭主隱れたる德行家……三七
古賀聯隊長の壯烈なる最後……四〇
感　狀……四一
戰場で負傷した時の心得……四二
戰場には何を携帶するか……四五
同情せずに居られぬ淋しい未亡人……四六
日蓮上人の靈德我を救ふ……四八

天御中主神と萬物造化の靈德

我國最始の歷史は古事記である。古事記は元明天皇の御勅選に係るもので、我邦にて最も重きを置く所の皇典である。其開卷第一に宇宙開闢の順序を記述して

天地の初めて發くる時高天原に成りませる神の御名は天御中主神と申し奉る。次に高御產巢日神。神產巢日神と申し奉る。此の三柱神は並獨神成りまして隱り身にましますなり。

之れ未だ天地も日月も星辰もなかつた時に其虛空の中に先づ神樣が出來たのである。第一番に出來されたのが天御中主神で、其次に又二柱の神が出來されたのである。

然るに此の神は皆獨り神なりまして親樣からお生れなされたのでなく、虛空の中にお生れなされたのである。又此の神も隱り身と云ふ人間の肉眼には認める事の不可能な靈ばかりであつたと申してある。此記述には宇宙開闢の深甚なる意義が含まれて居る。先づ靈とは魂と解すればよい。此の三柱の神を造化の三神と申し奉る則ち、此の神業により天地が出來、次に神が現はれて萬物が發生したのである。此の三神の次に現れた神は

宇麻志阿斯訶備比古遲神
天之常立神

此の二柱の神も亦獨り神成りまして隱り身にまします以上五柱の神を別天神と申し奉る次に成りませる神は

國之常立神　豐雲野神

此二柱の神も亦獨り神成りまし次に成りませる神は

宇比地邇神　妹須比智邇神
角杙比神　妹活杙比神

意富斗能地神　　妹太斗乃辨神
游母陀琉神　　妹阿夜訶志古泥神
伊邪那岐神　　妹伊邪那美神

國常立神より以下併せて神代七世と稱し、此の神々の御名には何れも靈德が含まれてゐて誠に意味深長である。要するに天地萬物發生成長の順序である。別言すれば宇宙の大元靈たる天御中主神の神業に依り天地萬物が創造せられ漸次發展し來る順序である。古事記は之より漸次人智の理解に近づき來るのである。

神代七世の最後に現はれたる伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神に天津神の命を以つて

『是タダヨヘル國ヲ修理固成セヨ』

と詔り給ひて地球の開發を御依托になられたので、二柱の神は天津神の命に從ひ種々の神業を現はし給ひて『オノコロ島』を發見され、此の島に降り夫婦の語らひを爲し給ひ島を產み國を產み多くの神々を產み、日本國を開發し給ふたのである。最後に伊邪那岐神より御產まれ遊ばされた神は

天照大御神　　月讀尊
建速須佐之男尊

伊邪那岐・伊邪那美二柱の神は夫婦の語らひを爲し給ふと雖も、其神業はまだ人間とは遙かに懸隔のある神である。始めて人格的に現はれ給へる神は皇祖天照大神である。則ち隱り身の神たる開闢元始の天御中主神以降始めて、人格的に顯現せられたる神である。天照大御神は則ち天御中主神の現身にして天御中主神は天照大御神の隱り身である。故に天御中主神と天照大御神とは同一神の別名であると拜察し奉るべきである。天照大御神は高天原を治ろし召され、御子忍穗耳尊に大日本國統治の大權を御委任になり萬世一系の國體を建て給ふたのである。

忍穗耳尊の御子即ち天照大御神の皇孫にまします邇

々藝尊に三種の神器と多くの神々とを賜ひ始めて、此國土に降らしめ給ふたのである。其神統とは

一、天照大御神　　二、天忍穗耳尊
三、日子番能邇々藝尊　　四、日子穗々出見尊
五、鵜葺草葺不合尊

以上を地神五代と申し奉り鵜葺草葺不合尊の御子は神倭伊波禮比古尊にましまし即ち、人皇第一代神武天皇にまします爾來神統連綿として第百二十五代の今上天皇は、則ち開闢最始の人格的の神　天照大御神の直系神統に渡らせ給ふ皇孫にましますのである。故に古來天皇を現人神と尊崇し奉り憲法にも『天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラズ』と定められた所以である。以上は甚だ簡單なる說明であるが然しながら、之に依つて天御中主神の天地萬物創造化育の一班を窺ひ奉ると同時に大日本國は神國なりと申す事實の大要は諒解せらるゝ事と思ふ。

我日本國の歷史を見る時に最も大事業と申せばそれは神武天皇の建國の大事業であり、其大業に次いで第二の大きな事業は、明治天皇の憲法の御發布である。神武天皇の建國の大業は明治天皇の憲法御發布に依つて始めて、其の精神が完成せられたものである。

明治天皇の御事蹟は凡ゆる方面に於て神武天皇の大業を更に御成遊ばされたのである。

明治天皇の多くの御治蹟の中でも就中憲法の御發布において特に其感を深くするものである。神武天皇の御東遷を記念申し上るこの秋に當り日本憲法の精神を國民の總ては研究し且つ、之を實行するのが感謝であり而して國民は建國の皋に還るべきである。

建國の大國是と國民の使命

建國の大國是とは國家成立の根本方針である。我國建國の國是は其建國の肇めに於て皇祖天照大御神より皇孫邇々藝尊に下し給へる神勅に由つて決定せられたのである。其神勅とは

豐葦原ノ瑞穗ノ國ハ吾子孫ノ王タルベキ地ナリ宜シク爾皇孫就イテ治シメスベシ行ケ寶祚ノ隆ヘマサンコト當ニ天壤ト與ニ窮リ無カルベシ

是れ則ち萬世一系の神勅にして皇祖大御神の神系皇統を以つて日本國の主權者と制定せられたると同時に、此神勅を尊奉して謬ることなくば國家は天地の窮りなきが如く千代に八千代に隆へる事を豫言せられたる大詔である。之れ我大日本國體であつて此大詔を事實に現はす事を國是と言ひ、而して憲法には

『大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス』

と制定せられてある。之れ則ち皇祖の神勅を一層明確に表證せられたるものである。顧ふに我國民が開國以來幾千年何者にも依頼せず、又決して他國の力を借らず、獨立自主能く皇統と國家を保持し來り、遂に世界一の强國に迄進展せしむるに至りしものは、偏へに皇祖の神勅を嚴守し、身命を拋ちて皇統を守り來る結果に外ならぬのである。而して上下一致天皇と國家を守護し奉りしは偏へに神勅を嚴守せるに依るものである事は言ふ迄もない所であるが、夫れには又深き理由が存するのである。皇孫の尊が此の國に降臨し給ふ時皇祖大神は其部下の神より五伴緒を始め三十二神の上首と共に多くの神々を選拔して皇孫の守護として降し給ふたのである。而して此神々の總大將とも稱すべき天兒屋根命・大玉命に特に左の御神勅を給ふたのである。

『殿内ニ侍イテ善ク防ギ衛レ』

之れ則ち君臣の分を明かにし、皇統と臣系の大義を制定し給へる神勅である。此天皇防衛の任務を命ぜられたる神々の子孫が則ち國民である。故に能く一身一家を犧牲に供して此神勅に答へ奉る日本魂を釀成し來つたのであつて、此の神勅が則ち日本魂の源なりと信ず吾人の祖先が能く皇祖の神勅を嚴守し以つて皇統と國家とを今日の吾々に完全に引繼げる大功績を立てるには、其必要上より遂に種々の國民性を養成し來つたのである。中にも左の五事は確かに世界獨歩の特長とする所である。

獨立自主　尊王護國　敬神崇祖
勇武進取　採長補短

現今に於ける思想惡化とは此の五事に反する思想と云ふのである。而して國民精神の振興とは此の特性を振ひ起す事である。世の最も難解とせる開闢以降の神々の事蹟を說き來りしは、神德の一班と吾人の祖先が祖神と皇室とに如何に深甚の關係を有せしものなるかを告げ、此の思想非常時を解消するに當り、我國民は特に我國成立の根本義を明かにし、祖神の靈德を体得して國民の特性を發揮する事に一層の努力を要するのである。之やがて自己の人格を向上し併せて日本精神を增進する所以である。天皇は則ち天御中主神の現身たる天照大御神の延長にましまし、國民は天照大御神の御部下たりし皇孫臣系の神々の延長である。加之平氏は垣武天皇より出で、源氏は淸和天皇より出でたる如く、皇室より降下して臣系に入らせられたる皇族も少なからざれば、是等皇族の子孫も亦甚だ多數である。

故に我國民は何人と雖も差別なく、總てが神の分身なりと叫ぶ所以である。日本國民總てが神の子なりと自覺すれば、思想問題たる融和事業の徹底を期するにも亦緊要であると信ず。依つて融和事業は其目的を融

和國體にのみ要求せず、一般國民も修養理解し、日本民族の成立を明かにし、國民一體精神の徹底に力め、因襲的差別觀念を根絶し、日本國民は神の子なりと信ずるこそ日本精神の振興であり國民の使命である。

日本國民と皇室中心主義

宇宙間一切の物には、大なる物にも小なる物にも苟しくも形象のある以上各々夫れに中心がある。中心は則ち主觀である。此中心主觀を物の本體と稱する人にありては心が中心主觀である。人間に中心主觀ある如く太陽に太陽の中心主觀あり、月にも、地球にも、星辰にも、地球上の動物植物其他凡ての物に中心主觀がある。之れを大別して天の中心主觀、地の中心主觀、人の中心主觀と云ひ、此の三者を宇宙間に於ける三極と稱す。而して此の天地人の中心主觀は相對の主觀であつて宇宙の中心主觀より分派されたるものである。故に宇宙の中心主觀を絶對中心主觀と稱す。

宇宙中心主觀は則ち開闢元始の大元靈である。國に依り言語の違ふ如く、此の大元靈に對しても其名稱を異にして居る。東洋に於ける宇宙論の創說者は此の大元靈を稱して道と名付け、孔子は天と稱し、釋迦は如來と解き、西哲は自然の理と稱して居る。而して我邦に於ては天御中主神と申し奉るのである。天は宇宙の義、御は敬稱、中主は中心主觀の意で神は人格的尊稱である。故に天御中主神とは宇宙の中心主觀たる尊さ御方と云ふ意義である。

月は地球を廻り、地球は月を伴ふて太陽を廻り、太陽は地球其他の星辰を連れて快速力で天空を飛んで居る。宇宙間一切の者は何ものも活動せざる者はない。然るに地球に月を繫ぐ糸なく、太陽に地球を繫ぐ鎖なきも一億萬年の昔より少しも離れず、常に一定の軌道を辿つて居るは則ち宇宙の統一である。春は花開き、秋は實を結ぶ。櫻には櫻の花開き、梅には梅の香匂ふ年々歲々變る事なきは宇宙の誠である。

此の誠と統一とは宇宙進化の必要より行はるゝ天然自然の法則である。故に此自然の法則に從ふ者は進化し之に背く者は退化す、萬物一として此理に漏るゝ者はない。人にあつても亦同じ、自然の法則に遵ふ者は榮え、之に背く者は衰ふ。今の世相は明かに之を證明して居る。宇宙の大理想は進化である故に此大理想を妨害する者は存在の必要はないから遠慮なく退化さるゝのである。

此自然の法則は則ち宇宙の大元靈たる天御中主神の掟である。故に神ながらの大道と云ふ我國民は太古より此の神ながらの大道を遵守して能く活動し、能く統一して居る。而して正直である故に能く大日本帝國を金甌無缺に造り上げ吾々に引繼ぐ事が出來たのである能く一定の目的に意思を統一し、正直に働いて來た、此正直と統一と活動との一つでも缺げたならば繁榮は期せられない。況んや不正直にしてしかも働かずに金を得んと思ふが如き者を神が見逃がし給ふ事があらうか、神は聲なきに聞き形なきに見るのである。畏れて恐るべきは神の掟である。

人の動きが心によつて爲さるゝ如く宇宙の動くのも心である。地球は動く、月も太陽も一切萬物も亦動く萬物活動とは形容詞でなく事實である。中にも地球や日月に心なしと疑ふものもあるが速斷してはならぬ。一切萬物に心あると云ふも夫れが皆人間の意識と同一でない。學者は心を定義して動と云ふ動は則ち心なり故に動く者は皆心あるなり。中心主觀とは之を云ふ。

此の心を神と稱するのである。宇宙の神を天御中主神と稱し、天の心を天常立神と稱し、地の心を國常立神と稱す、されば人間は則ち人常立命であらねばならぬ。

然しながら宇宙や天地は自然の法則に從つて動くけれども、人間は自然の法則に背いて動く事が少なくない。故に人間は心全體を神と云ふ事は出來ぬ。則ち天御中主神が賜ひし靈『タマシヒ』が神である。此魂を生きながら活用せんとするのである。別言すれば生體の儘にて吾魂の上に大なる神の力を感合して地上に天國を實現せんとするのである。故に此自然の法則を理解し神と人との關係を深く信ずるならば、日本精神は神の掟なるが故に日本國民の特權である。則ち日本國民は天照大御神の延長たる皇室が中心主觀であるから日本國民が此の中心主觀に向つて一人も殘らず生命を捧ぐる事は神の掟である。則ち動物の中心主觀は人間である。此の中心主權たる人間の必要に應じて總ての動物が生命を捧ぐるは原理である。此法則を理解し得るならば中心主觀たる皇室の御爲に吾々國民全體の生命を捧ぐる事は當然の理であり守り易く行ひ易いのである。

我國民性と傳統的信仰の力

明治天皇御製

日に見えぬ神の心にかよふこそ
人の心の誠なりけり

宇宙の精神は全知全能完全無缺である。人の精神は宇宙の神の分派であるから厚則として其源と同じく全知全能完全無缺である。唯宇宙精神は萬物を創造するも人間には創造の力はない。然れども宇宙精神の創造せる一切の物は人間が支配し利用する事の出來るように、特に理性と云ふ大切な物が與へられてゐる。

理性とは眞理を見る目である。神の不言の聲を聞く耳である。此理性の有無こそ實に人間が動物と異なる特長である。人は自ら運命を開拓して其境遇を改善するも、熊は何時迄も穴居生活を續けて居る。故に人間は其の持てる理性の力を自覺すると否とに依り、或は神に進化し或は動物に退化する。

心は人の本體である、人は其の心の思ふが如く成る者である。幸運も不運も心の儘である。運命の法輪は常に心と云ふ技師によつて廻轉せられつゝある心の活用法を知る事は幸運の寶庫を開く唯一の鍵である。思考には原理あり、希望には法則がある。此原理と法則を知つて活用する事が大切で此原理と法則を事實に現はすは神の力にある此實現を最も迅速ならしむるは神法である。

吾人の祖先は敎へずして此奥義を實行して居る。現實主義が則ち夫れである。現實主義とは死後の天國よりも未來の極樂よりも現在を喜ぶ樂天主義である。要するに我國民は敵に對して勇武なるが如く死に對しても亦勇武である。皇祖の御神勅をを守つて天皇の御爲

に働き能く防ぎ衛らば神が知つて居る死も未來も恐るゝに足らぬと云ふ樂天觀を持つて居る。之れは決して野蠻未開の盲目的ではない。祖先傳統確固不拔の信念が存するのである。生命のある間は進んで天皇の御爲に働き生命が無くなれば祖神の膝下に歸り祖神と共に、又天皇を護り生きて居ても死しても天皇の御爲に働く之れが先天的任務であると信じて居る。

所謂生死一徹顯幽一貫せる大磐石の如き生死觀に安住して居る我軍人が敵の彈丸に斃るるや必ず『天皇陛下萬歳』と叫ぶ。之れ即ち滿腔の赤心が無意識的に迸ばしり出る神音である。外國軍人の樣に『神よ我を天國に導き給へ……』と利己的泣き言は放つて居ない。茲に日本人の特色があり萬世一系の天皇の尊嚴がある。

吾か恐れたる者は皆吾れに來るとは精神學上の一原理である。茲に安心立命の必要が生ずるので生死一徹顯幽一貫の生死觀は此の恐怖心を撲滅すべき祖先傳統の秘法であつて、此の生死觀の大安立なき者は人事百般常に、目的に反し失望に泣かねばならぬ。

『嗚呼恐怖心汝は實に人生を脅やかす惡魔である。』されば此忌はしき惡魔を驅逐する方法を講ずるは人間處世上の最大急務で之れを驅逐する方法は則ち祖先傳統的信仰の力である。

日本民族身心清淨法と心靈力

我日本民族身心清淨法の根本義は、身を清淨にし心を潔白にする事である身心清淨法は遠く伊邪那岐神が日向橘の小戸(オド)の阿波岐原(アワギハラ)に禊(ミソ)ぎ祓ひ給ひし神業に源を發したもので、伊邪那岐神が我大八洲を開發せし終りに『黄泉國(ヨモツクニ)より歸り給ひ吾は忌はしき穢き國に到りてありき故に御身の禊ぎを爲す。』と仰せられて御身を禊ぎ祓ひ給ひし古事に始まれるもので、此禊ぎ祓ひを爲し給ひし時に當り現はれ給ひし神が則ち天照大御神である。

爾來我國民は此神業に倣ひ、或は海水に、或は河水に身を滌ぎ心を淨むるの習慣を生じ、殊に神前に參拜する時の如きは、一層之れを勵行し明るき清き直しき潔きよき心を以つて禮拜を行ふが儀例と成つて居る。之れ則ち身心清淨法の略式である。

心身清淨は日々に過ち犯せる罪穢を一掃する事で自然の法則は神の掟である。神の掟は火の如し一日も缺ぐ事は出來ない知つて犯すも、知らずして犯すも結果は同樣である。如何なる偉人でも自然法則の罪穢のない者はない。故に朝に禊ぎ夕に祓ひ以つて心の清潔に努めなければならぬ。罪穢とは啻に道德上の罪惡ばかりではない。心の平和を掻き亂す凡ての精神狀態である。不健全なる精神作用は神經を不等に刺戟し血液の循環を不整ならしめ細胞の活動を萎縮せしめ生命の自作力を減殺し毒素發生して身體を害する者である。祖神の教なる罪穢禊ぎ祓ひの如何に適切なるかは現代科學に由つて明確に證明せられて居る。

神の創造は誠に用意周到である。精神の健全なる人は神經も健全である。血行も旺盛である故に常に明き

清き直しき潔きよき心を保つ人なれば惡魔の寄りつく余地がない。惡魔は此種の人を襲擊しても反對に擊退さるゝが常で、吾人を創造し給へる天御中主神は大能なる神靈を分ちて吾人に與へ給ふてゐる故に、吾人の生命や心の活動を司つて居る主人公を魂と云ふ魂とは『賜(タマ)ヒシ靈(ヒ)』と云ふ事である。故に此の『**タマシヒ**』を直靈(ナホヒ)とも云ふ此の直靈は諸種の靈能を發見する源泉である。神は斯くも靈妙なる魂を吾人に與へ給ふてゐる此の魂を夫々有効に活用すれば殆んど神と同じき靈力を發揮する事が出來るのである。

然り神が大能なるが如く神の分靈たる吾人も亦大能である。欲して能はざるなく企てて成就せざる事なく、地上に天國を築き現在を黃金世界に化するも、思想經濟や戰爭等の非常時局を解消するも、吾人が此眞理を自覺する事に依つて其基礎は定まるものである。此の神與の心靈力を發揮して神と同じき大能を現はし以つて安全と幸福と滿足の中に人生と云ふ再び歸る事なき旅行の目的を達せしめるものである。而して此目的を達すると否とは一に身心淸淨法の實行如何に依るものである。

强き信念と責任感念

日本國民は神の分身である。即ち神の子である神の子は人である。故に人は到底神に隱す事は不可能である。夫れは常に直靈と云ふ神の力に依り監視せられて居るからである。故に神の子たる日本國民は之を自覺して神の掟を尊守し、神の鏡にかけて心を治め身を修むれば神と同じき至德を成す人の希望は其人の信念に比例して目的を達せらるのである。『信』とは誠である。『誠』とは正直である。人は此の神の掟を强き信念を以て感謝し、併せて責任感念の汪盛なる嚴格勇敢等の男性的行爲の持主が皇祖大神の御神勅たる。

『殿內ニ侍ライテ善ク防ギ衛レ』

此の御神勅を嚴守し以つて皇統と國家を死守し得る者である。

『信ハ道ノ源功德ノ母ナリ』

とは釋迦の金言であり

『大信ハ佛性ナリ佛性則チ如來ナリ』

とは親鸞の解說であり

『立　正　安　國』

とは日蓮の强き信念であり

『皇國興廢在此一戰』

とは東鄕元帥の日本海々戰に於ける强き責任感念であり

『大君ノ御後シタヒテ我ハ行クナリ』

とは乃木大將の至誠至忠の神習であり

『七生人間ニ生レテ朝敵ヲ滅サン』

とは大楠公の御神勅を嚴守したのであり

『一人も殘らず軍旗を死守せよ』

とは古賀聯隊長が君の御馬前に名譽ある最期の御奉公

であり

　たらちねの親の教を守りてぞ
　弓矢の道を我は行くなり

とは空閑少佐が神の掟を嚴守して忠孝の道を國民に示した神業であり

　荒木大將の『竹槍を持つて戰ふ覺悟ありや』

とは非常時國難の解消をなす國民の强き信念を示した誠心である。

　昔も今も偉人の見る所同一轍である。蓋し眞理は無始より無終に亙りて變る事なき故である。

荒木大將の竹槍とは何か

幾度となく御製を恐察し奉り畏れ多い事であるが

明治天皇御製

　鬼神も泣かする者は世の中の
　人の心の誠なりけり

　人を動かすは誠心である荒木大將は佐賀市公會堂に於て三時間半に亙り水一滴も召されず血を吐く様な講演をなされた。その結論として忠臣義士の四十七士を引用し非常時を打開するには、『三百萬人の國民が竹槍を持つて能く防ぎ能く衞る決心あらば大將自ら指揮して契つて國家を守護する。』と申された。

　三百萬人とは國防の第一線に立つ陸海軍人であり、竹槍とは誠心である。三百萬人の軍人が神と比較した

る日本魂の持主なれ、則ち將校は楠公となれ、乃木大將となれ、空閑少佐となれ、兵士は四十七士となれ、三勇士となれ、化學的の武器よりも最後は『誠心の結晶で造つた肉彈の一發である』と叫ばれたのである。

　我が軍人に對し今更誠心と叫び肉彈と叫ぶ必要はない。然るに日本國は國民皆兵である。最後に戰ふ三百萬人は武器も無ければ訓練も無い只有るものは『誠心』のみである。

　淺野家の家臣も數萬人であつたが目的達成の時は僅かに四十七名であつた。或は忠孝と叫び日本魂と叫ぶも實行は困難である。戰場に於ける實際軍人の心境は普通人間の想像し得ない所である。荒木大將の竹槍を持つた三百萬人も、忠臣義士の四十七士も、肉彈の三勇士も、人間としては實行困難である。

　大日本と言ふ神の國に生れた眞の神の子であり、眞の神の分身でなければ成らぬ。淺野家の數萬人の家臣も日本國民であつた。然るに最後に殘つて本懷をとげた者は僅かに四十七士であつた。三百萬人の竹槍は荒木大將の金言である。國民は此の眞理を充分に研究し實行すべきであると信ず。

日本魂こ

三勇士の心境

著者は日露の役に從軍して軍神乃木將軍の配下に屬し、金城鐵壁難攻不落と誇りたる旅順要塞を背面より攻撃せんとして、金州南山城の敵兵を要塞内に追ひ込み海陸一致協力して確實に包圍したのは明治三十七年七月二十六日であつた。而して第一回の總攻撃は仝年八月十九日より仝二十五日の夜半迄數回の突撃に參加したが何れも功ならず、全軍殆んど全滅した。乃木將軍は全軍に對し『日本國名譽の爲め奮鬪せよ全軍死すとも退くな』と訓示した此の血を吐く如き悲壯なる嚴命に將兵一同奮ひ起つた。或は戰死し或は傷き殘る者は幾何も無かつたけれ共、喰はず呑まず、眠らず、奮戰を續ける事百五十日、突撃を決行する事三十六回、全軍の將兵は生き變り死に變り眞に肉彈に次ぐ肉彈であつた。著者は此の間數回傷き十數發の敵彈を受け最後に左胸部に重傷を負ひ、東雞冠臺下に五日間人事不省の儘で名譽ある戰死者と呼ばるる事も得ず、不具の身を三十年間惜からぬ餘生を保つて居る事を此の上も無き不名譽なりと自覺しながらも皇統と國家を忘るゝ者ではない。出征中も最後迄決死隊の一員として微力ながら御奉公申し上げた。數回の決死隊に加はり生存者は著者と前第六師團長坂本中將あるのみである。其の體驗に基き同じ兵士としての肉彈三勇士の心境と日本魂とを說明する時に眞に感慨無量である。

祖神の靈德に對し強き感謝の信念と汪盛なる責任の感念に依り自己を忘れ無我無心となる。之れ則ち人間を超越し神に近き行動であつて、以つて皇統と國家とを完全に守り得る者である。此の道を全うしたる者が楠公であり、乃木將軍であり、古賀大佐であり、空閑少佐であり、旅順閉塞の勇士廣瀨中佐であり、廟行鎭の花と散りし肉彈三勇士である。

此等の行動は人によつては不可能なる行動なる故に神として崇敬し永久に慰むべきである。山は高しと雖も其の比較する山により高くもなり低くゝもなる。日本人は外國人と比較したる時外國人の及ばざる日本魂の持主である。然るに此の非常時局に直面したる我が國民は外國人と比較したる日本魂の持主で滿足してはならぬ。神と比較したる日本魂の持主でなくてはならぬ。此の精神の持主が神となるのである。一般に叫ぶ所の日本魂とは神と比較したる日本魂の持ち主で無くてはならぬ。神の分身たる眞の魂は磨かなければならぬ。畏れ多くも明治天皇の御製を拜察し奉りても、非常時國民の此の魂に就き大御心を御詠ませ給ひし時に如何に國民の務めの重且つ大なるかを領づかるゝのである。

敷島の大和心を磨け人
今世の中に事はなくとも

昔より皇統と國家を此の精神を以つて守護したる幾多勇士の行動を國民に其の範を示し、其の誠心を植付けんと努力せしも遺憾せん。此の名譽ある勇士の心境を說明するに完全なりと信ずるを得ざるの感あり、惟ふに文學より見たる實戰場の光景は想像以上である。著者は文學者に非るが故に文書に花と咲かす事は不可能である。しかれども日露の役に於て決死隊となり人事不省者となり、奇蹟的にも九死に一生を得た體驗に基き同じ勇士の最期の心境を我が身の如く思はれて朝夕崇敬する者である。依つて自己の體驗より三勇士の心境と日本魂との關係を說明し非常時國民の自覺を促す所以である。非才の筆を以つてする著者或は禮を失する点多々あらんも國家を思ふの一念を汲み幸に了せられん事を……而して說明の順序として戰況を二つに

區別するの必要を認むるものである。

甲、攻むれば必ず取り進めば必ず退く追擊に加ふるに全滅則ち連戰連勝の時を普通戰況と云ひ

乙、攻むれば全滅し進めば負け進むに道なく攻むるに術なく連日連夜惡戰苦闘之を不利の戰況と云ふ

此の不利の戰況を有利に轉ずる。此の時にこそ普通人間にては出來得ない神の示せし日本魂である。三勇士の肉を散らしたる戰況は最も悲慘なる不利の戰況であつた事と信ずる。當時廟行陣地に於ける三勇士の指揮官松下大尉の指揮を見る時に日露の役に於ける旅順背面の戰記と同じく、幾回も決死隊を選出して突擊の通路を開設せん爲め、副防禦の爆破に全力を集中したるも一回も成功せず全滅したに相違集い。故に三勇士のみが肉彈なり日本魂なりと叫ぶものではない。此の時決死隊員に選拔され全滅したる忠烈悲壯なる全員の心境を旅順に於ける決死隊と比較して實に感慨無量嘆せざるを得ないのである。

三勇士は全滅したる戰友の勇敢なる行動に奮勵され最後に此の任務を全うしたる者である。三勇士の成功は則ち全滅した決死隊全員の任務の引繼ぎを受け、而して此の靈魂の守護による賜である故に決死隊全隊の代表者として、肉彈三勇士と言ふ神名を附せられたのである。日本軍人の行動は總てが三勇士であり肉彈である事を忘れてはならぬ。

而して肉彈とは肉と骨を散らした丈ではない。此の場合の肉體は何時にても散らすが本意である。此の場合に於ける肉彈とは『强き信念と責任感念の汪盛なる誠心』の結晶が彈丸となつて炸裂したのである。此の肉彈が一發あれば難攻不落の要塞も、山より高き海城も、容易に破壞し不利の戰況も有利に好轉するのである。

三勇士の行動は不利の戰況の場合に起るものであ

る。不利の戰況とは悲慘なる戰況である。元來日本軍は退却する事を知らぬ。それは日本軍は敵に對して進取する。最後は突擊を以つて如何なる强敵でも全滅させる。之れが我が軍の戰法である故に時には反對に我が軍も不利の戰況に陷る事は覺悟である。外國の軍人には此の覺悟が乏しい。

『突擊を決行する全軍全滅するとも退却を許さぬ』とは我軍の嚴命である。此の嚴命を實行するのが我軍人の特長である。此の戰況を文章家に書かせると射ち出す彈丸は雨霰と言ふ。之れは所謂實地を知らない者の言ふ事である。雨霰には空間がある。此の戰況の場合には空間がない天地間全體が火の海である。此の火の海の中に皇軍の將兵は連日連夜喰はず呑まず獅子奮迅の攻擊を續けてゐる。決死隊は全滅する陣地を守る戰友は鮮血にまみれ、しかも微笑しながら『天皇陛下萬歲!』と三唱して散兵線の花と散る。

此の戰友の最後を見た時寧ろ苦戰に陷るばかりで突擊の機會は見えない。此の悲慘なる戰場の光景に三勇士が全身の血潮は逆流したに相違ない。之の戰況を見ながら最後の大任を決行する。之れが決死隊中の眞の決死隊である。此の場合皇軍行動の行詰りの狀態である。指揮官の下す命令も共に行詰つたのである。部下を愛する親の如き慈悲心深く自己の危急の時猶ほ部下を思ひ遣る指揮官は此の行詰りたる時の命令を如何に下したか『何某行け!』と指名せず『今一度最後の決死隊を出す勇敢なる者は行け!』と此の時下した命令は神の命じた神晋である。此の神晋に應じて『私が行くと』答へたのが神の子である纏へる爆彈に火をつけたと同時に三勇士自己の精神は肉體に先んじて目的の鐵條網の中に躍進した。殘されたのは三勇士の肉體と火の付いた破壞筒であつた。此の肉體と破壞筒は如何に處置されたか之れを目的地に送るは『日本魂』と云ふ『精

心』である。『日本魂は自己の精神の去つた肉體を一時自由に行動さす偉大なる力を有して居る。』此の日本魂によつて行動する肉體に火がつくとも、彈丸が當るとも、手や足が切れて飛ぶとも、完全に目的をし遂得るのである。著者の叫ぶ日本魂とは『生死榮辱を考ふる餘地なく無我無心となる。』之れが三勇士の心境である。

嗚呼其の最期の神の如き精神忠烈悲壯慘鼻の極洵に鬼神を泣かしむ。我が勇敢なる三勇士は遂に堅壘廟行鎮と共に炸裂し、一塊の肉片も殘さず山櫻の夜嵐と共に勇ましく散り殘るは梅の香の如き名のみである。或は日本魂と叫び肉彈三勇士と讃美し上海事變解決を早からしめ米國の無敵艦隊を本國に驅逐し世界人心に大なる衝動を起さしめた。

此の精神の持主が楠公であり四十七士であり、荒木大將の叫ぶ竹槍であり、神の國に生れたる神の子であり、非常時局を打開する鍵なりと叫ぶ所以である。

× × × × × × ×

日露戰役
出陣の觀兵式

我が軍人の勇強なる所以は神の國に生れた神の子であるから勇强なる事は殆んど世界を通じて古今獨歩である。是は偏へに祖先傳統的能く皇祖の御神勅を嚴守せる結果であるとは言ひながら元來日本國の山川の雄偉なる自然の形相が自から因をなし果を結んで其の勇强に感化を與へたものである。

明治三十七年二月八日に砲門を開いた我が皇軍は海

に於て旅順の軍港に强襲を試み、陸に第一軍が鴨綠江の流を押し渉り九連城を一擧に奪取し、東鄕提督の英斷やスクリドルフ提督の露都出發やらで新聞號外は飛ぶ餘程世間は八釜しくなつた。開戰以來ぢつと辛抱して時の到るを待つて居つた將兵は最早辛抱が出來なくなり全身の肉は張り裂けん許りでぶる〳〵と武者振した。動員令が下る。豫備兵が入營する。士氣は更に旺盛になる明日は出陣か、今日は命令が下るかと、唯來る明日の日を待ち通して居る。定に軍人と言ふ者は無邪氣なもので恰も子供がお正月を待つ氣分であつた。此の日練兵場に於て大觀兵式は行はれた。

抑も此の日の觀兵式は畏れ多くも我が叡聖文武の天皇陛下に對し奉り最後の御奉別の爲め執り行ふ世にも嚴肅なる盛儀大禮であつた。式場には一點の塵も止めぬ大廣庭に喇喨たる喇叭の音も勇ましく順序正しく整列し東面最敬禮の姿勢に將兵一同感激の度益々加はり士氣沖天の勢であつた。師團長は幕僚を從へ馬を式前に進め壯調なる喇叭の吹奏につれて嚴肅なる式は終つた。式後愛國婦人會、赤十字社兵事會其他官民合同の宴會が開かるや師團長は威風凛然式場に進み挨拶を述べた。

> 頃日日本ノ一隅ニ一男子ガ生レタ其ノ成長ヤ極メテ健全近キ將來ニ於テ遠キ旅路ニ上ラントス玆ニ諸君ヲオ招キシタハ此ノ男子ガ將來成功ノ御援助ヲ依頼センガ爲デアル本日ノ觀兵拜神ノ式ハ軍人死後ノ光榮ヲ發揮シ努々將兵ノ志氣ヲ激勵シタノデアル。

是れ則ち餘所ながらの暇乞ひであつた。此の嚴肅なる觀兵の大禮こそ二度と得難き名譽であり、而して君の御馬前に身命を捧げ一身一家を打忘れ御奉公の誠を契ふべき式であつた。

出陣當日

妻子の訣別

愈々出陣の日は來た。恰も彌生三月見渡す山川は春光滿ち滿ち千里鶯鳴いて綠紅に映ずるの時外國迄身を捨てに行く日、去つて行く人、止つて歸へる人、相ひ共に涙聲を呑む斷腸の思ひである。是れは眞の見送りの人所謂肉身の人々であるから耐らない。『何とかして最後に親の顏妻子の顏を今一度見たいもの……』と顏にも色にも出さないが凡そ三千世界に子を持ち親を持つ心は皆一つ素より卑怯未練でなく人情の常である。時に親姉妹妻子の顏は是が最後の見納めで二十年間の御恩は海山にもかへ難く昔にこそ泣かね、胸の裡から溢れ出て居るは出陣の涙である。人は木石にあらず誰か涙なからん。情に厚き武夫の落すは胸の露、是ぞ忠魂義膽の根ざす所である。

氣を付けの喇叭は鳴る。整列の正面には軍旗が進む。是れぞ我が　天皇陛下御自身自ら投け給ひし御旗である。軍の精心軍人の骨である。此の御旗のある所則ち陛下の御馬前である。萬象一同最敬禮を表し。親姉妹や妻子一家一身も打忘れ此の君の御馬前には唯誠の一字あるのみである。

我が軍の勇ましき

乘船と捕虜の上陸

愈々乘船の朝數十萬人の見送りが押かけた。出發の時刻も來た旅團長山中信義將軍の訓示があつた。文體が長いから手記の中一部の要點のみを記す事にする。

余ガ最モ親愛スル將兵ニ告グ今回ノ戰ハ振古未曾有ノ一大事，勝敗ハ國家ノ存亡ニ關ス。此ノ國難ニ會シ諸士決心ト覺悟アルコトハ余ノ深ク信ズル處諸士ノ勇氣凜々トシテ喜色滿面ニ溢ルルヲ見ル。余ハ轉タ滿足ニ甚ヘズ、諸士ハ今回ヲ以テ初陣トス。シカモ敵ハ名ニシ負フ露國ナリ千載ノ一遇無二ノ名譽、而シテ亦我ガ軍旗モ初陣ナリ。今ヤ諸士ハ此ノ軍旗ヲ奉シ光榮アル戰場ニ立タントス。此ノ軍旗ノ向フ處恰モ烈風ノ枯葉ヲ掃フガ如ク。敵ノ心膽ヲ寒カラシムルヲ余ハ如斯壯烈ナル軍旗ノ下ニ、諸士ト生死榮辱ヲ同フスルヲ無上ノ光榮トナス。諸士ハ此ノ機會ニ於テ偉大ナル戰功ヲ顯ハシ武威ヲ四海ニ輝カシ以テ國史ノ基礎ヲ作リ長ク其ノ名譽ヲ後世ニ傳ヘ、常ニ　陛下ノ股肱國家ノ干城ヲ以テ自任セル諸士ハ勅諭ノ五事ヲ服膺シ至誠以テ其本分ヲ盡スベシ。陛下ハ今回『特ニ卿等ノ忠誠勇武ニ信頼シ其ノ目的ヲ達シ帝國ノ光榮ヲ全フセヨ』

トノ勅語ヲ下シ賜ヘリ。誰カ感泣セザランヤ余ハ諸士ト共ニ力ヲ盡クシ速カニ敵ヲ討滅シ上ハ宸襟ヲ安ンジ奉リ、下ハ國民ノ信頼ニ違ハズ國家ヲ富嶽ノ安キニ置カン事ヲ期ス、今回ノ戰ハ實ニ東洋永遠平和ノ爲ノ義戰ナリ。遺恨十年ノ屈辱ヲ晴ラシ先輩忠魂諸士ノ神魂ヲ慰ムベキ好機ナリ。監視列國ハ前ニアリ益々軍規風紀ヲ嚴守シ大目的ヲ達スルコトニ努力スベシ。今此ノ光榮アル出陣ニ際シ一言以ツテ告

示トス。

此の告示を終り軍旗を先頭に笹井中尉の指揮する決死隊四十七士は軍旗を守り一行三千有餘の健兒の隊列は昔ながらの俤を止むる譎にある樣な松山城に名殘りを惜み長蛇の如く殷々と乘船場高濱に近づくや折りしもあれ、戰に敗北せる敵將捕虜の上陸を始めた。捕虜の面々は見るも氣の毒なる有樣で昨日は住みなれし祖國の同胞に出陣を送られ、今日は武運拙なく捕はれの身となる武士の習ひとは云へ淺魔敷きは身の行く末である。出陣に際し山中將軍の告示に感激の餘り落涙に咽び、今又敗將捕虜の武運拙なきに同情の涙に暮れ悲喜交々せまりつゝ萬歲々々の見送りの中に乘船し汽笛一聲勇ましく進行を始めた。

船はもはや嚴島の沖合に差かゝつた南は豫州の山々が煙の如く、東は能美、江田島の島影淸く嚴島神社は三笠ヶ濱の下にあり、淨海入道が再建したと云ふ日本三景の一で瀨戶內海中の明媚の地、出征の將兵も武運長久を祈りつゝ早や赤間の關に差しかゝり、特に日淸役のポーツマスで出征將兵の感慨は自然に呼び起され此所を過ぎ船は玄海を後に西北に向ひ名にし負ふ黃海の波濤を橫ぎり、何處ともなく進航を續けた。

御用船〃阿波丸〃

船中の心境

名にし負ふ黃海の波濤を橫ぎる六千三百九噸と云ふ山なす大船は、明治三十三年七月長崎三菱造船所で進水した日本郵船の所有阿波丸である。夜は段々深更となる半輪の月は中空にかゝつて春の夜の海上を照らす一人甲板上に立ち空しく月明に對し俯仰感慨に沈みデツキに身を寄せて

美酒ウー夜光ノ杯イー飮マント欲シテ琵琶馬上ニ催
スウー醉ヒテ沙場ニー臥ス君笑フコト勿レー古來イ
ー征戰幾人カ回ルウー

詩の獨吟の聲も少さく長く、月にも亦情あるかと疑はれ、或は長唄に或は大津江にと武夫の船中の心境は誠に無邪氣で面白いものである。浮世三昧の研究する人もある。明日の命も知らぬ出征の身の上、船中に入れば戰友の誰れかは

『斯ク申ス某ハ武藏ノ國ノ住人熊谷次郎直實見參セン。……』

等と御芝居をやつて居る兵士もある。是れで船中の無聊は打忘れ晴天で、船は早や黃海に差かゝつた。此の邊は海上の警戒線內に入り帝國の艦隊は隊伍を整へて見えかくれに張番の任務を盡し、愈々戰爭の氣分になり各自の藝當も禁ぜられ、消燈を命ぜられ何となく戰署上奧床しき所があると思ひつゝ上陸地たる臺灣に停船し、上陸の命を待ちつゝ靜かに戰の準備に取りかゝつた。

金州南山城の初陣

船中に於て金州南山城攻撃の命を受け上陸後直ちに戰闘隊形に移り、上陸地より南山城迄十餘里の路を七時間の快速度で强行軍をなし南山より敗北する敵兵を息つく暇も與へずに止まれば突擊し、逃げれば追擊し、我が軍の攻擊も勇ましきものだつたが、敵の背進も亦勇ましく敵は大砲に小銃に彈藥に糧食に加之數知れぬ死傷者迄も捨て置いて、『迚ても日本軍は豪らい是りや耐らない』と青泥（大連）迄も置き去りにして逃げ出した。洵に惜しい事をする者で五億萬圓も大金を費して折角造つた立派な市街も東洋一の港も財産も無しにしてしまつた。

戰爭も此の樣に苦も無く勝てば演習よりも面白い。

日本軍には是れ程恐れるものかと愉快に追擊して青泥港の背面王家屯一帶に豫め準備して居た陣地に停止した。我が軍も約二千米突の距離に散兵壕を急造して双方對陣の姿勢をとり、是から死傷者の整理收容が始まつた。數班の救護隊を組織し、第一に負傷者の收容に着手した。我が負傷者の中に目色の異つた敵の將兵が頭を下げ手を合せて泣きながら救を求めて居る。彼等の銃劍に我が親愛なる戰友の多數が忠烈なる戰死し傷づかされたかと思ふ時、唯一突きと銃劍を構へたが待て出陣に際し特に陛下の御製を思ふ時に

明治天皇御製

國の爲仇なす仇は碎くとも
いつくしむへき事な忘れそ

國に仇なす敵兵なるも彼等も同じ勇士である。加之戰闘の力無き將兵が救ひを求めてゐる此の偉大なる數限りなき大御心が、敵の將兵に迄及ぼし只一つしか無い繃帶を取り出し敵將兵の止血を行ひ假救護所に運搬し、衛生隊員も亦我が將兵以上の取扱ひをなし充分に慰めれば彼等將兵は此の廣大なる御聖恩と、我が軍の慈悲心に感涙して戰場を去つた。此の愉快極まる戰勝の我將兵が八月以降旅順の空に血の雨を降らし、全滅亦全滅の大悲慘事を演ずるとは思ひ至らなかつた。

最新式の武器を利用する敵の逆襲

旅順背面の第一線たる防禦陣地劍山の天險を奪はれた敵兵は、無念遣る方なき思ひで何とかして今一度盛り返して更に完全に防禦すべく隙あらばと心膽を碎ひて居る。敵は安子嶺を中心に左右に兩翼を張り凡そ一個師團の兵力を以つて逆襲して來た。同時に我が陣地に對し白晝より更に明るく照らした此れが探照燈であつた。我が軍は夜の暗きを利用し萬事に忍びの術を應用して居る戰場を不意に照らされて何だか敵に先手を取られた氣持、敵は軍樂隊を利用して鼓聲勇ましく頗る陽氣に『ウーラウーラ』と叫び我が保壘を飛び越へ逆襲し、何分暗夜探照燈の強力な光の爲め敵方は一寸先も見通しつかず敵の毒刄に傷きたる將兵も數知れず流石の我軍も一時苦戰に陷り豫想以上の損害を受たが、得意の白兵戰を以つて一齊に攻め立てた。敵は大狼狽し暗さは暗し處は名にし負ふ劍山天然自然の巖角恰も馬の背に名劍を樹てたる如く何處へ逃げ行く所もなく進退を失し只『ヒーヒー』と悲鳴を揚げつゝ雪崩を打

つて絶壁から深谷へ轉落する。實に悲慘なる光景で敵も吾が白兵戰には膽玉を拔かし彼等は遠く逃げ去つたものと思つた。其の夜はかくして空しく明けた。

明け行く空に前面を見渡せば、敵は昨夜に倍加する精鋭の兵を擁し依然として攻擊の陣を構へ新式の機關銃、大砲榴彈、亦榴散彈等頗る威力ある精巧なる武器を網羅して吾軍に對峙した。如何に勇邁なる我軍も天から降り來る彈丸には反抗も出來なかつた。かくては損害を增すばかりと遂に攻擊に轉じた。流石の强敵も支へかね凡そ四十時間の後、旅順要塞第一線の防禦陣地より敗走し、確實に旅順要塞線內奥深く追込んだ之れより眞の要塞戰の陣立となつた。

赤十字旗の偉大なる力

旅順攻擊軍の惡戰苦鬪は國民は申すまでもなく世界的に認められてゐるので、今更特筆大書する必要はない同時に露軍も亦同じ戰況であつた彼我共に惡戰苦鬪である。此の戰況に於て彼我共に赤十字旗を利用することの偉大なる力あるを忘れてはならぬ。只之れを善用するか惡用するかの二者あるのみである。

金州南山城に敗北した敵兵は汽車を利用して狙擊步兵第十五第十六兩聯隊凡そ四千人を收容して旅順要塞內に敗走せんとするを發見した。我軍は諸兵協力して退路を絶たんと猛烈に砲擊を開始した。敗走する列車は數十輛に數十本の赤十字旗を押し樹て驀進する。世

界萬國博愛の精神を以つて認容せる萬國同胞の精神に面して射つこともならず赦して遣らなければならぬとは實に遺憾千萬である。然し此處に我が軍の偉大なる强味があり又一躍五大强國と成り得たのである。

亦或時は數日間我が軍の猛烈なる突擊により彼我共に無數の死傷者を戰場に遺棄しながら收容は絶對に不可能である。斯る場合にあつては双方陣頭に赤十字旗を押立てる銃聲は一時に止む。軍使が出る此の忠烈なる死傷者の收容條約が成立する。彼我協力して收容が終る。赤十字旗は陣頭から下りた。亦猛烈なる砲擊突擊が開始さる。幾度となく此の博愛の精神が繰りかへされ彼我の死傷者は斯くして救護された。實に戰場にありて此の實況は涙なくしては見られぬのである。

此の忠勇なる彼我の傷兵は我が野戰病院に收容された。病院と云つても天幕內である。天幕高く赤十字旗は揚げられた。露兵は此の博愛を無視して猛烈に砲擊する。防備なき病院に對しての砲擊如何とも施す術なく彼は萬國博愛の精神を歛ぎたる非道德者である。則ち此の偉大なる赤十字旗を惡用し無視する者である。

天は何うしてこれを見逃す事が出來よう則ち連戰連敗は當然の理である。我が忠勇なる國民は如何なる苦痛の場合と雖も赤十字旗の世界萬國博愛の偉大なる精神を嚴守し博愛の精神に感謝する事を忘れてはならぬ。

小學兒童の叫ぶ萬歳

戰場に在る軍人は戰ひに絶對に勝つと言ふ事と、喰つて眠ると言ふ外何者も考へる餘地はない。乃木大將の陣中の句を見るに

　急ぐなよ旅順の敵は逃げもせじ
　よく喰つて寢て起きて戰へ

然るに喰つて寢ては戰の疲勞を慰めるものみで勇敢に猛烈に戰はしむるのは銃後に於ける國民の熱烈なる聲援である。軍人の心を動かすのは小學校の兒童の聲である。『萬歳！』と叫び出陣を送らるゝ時無我無心で兒童の叫んだあの萬歳の聲は突撃の場でもはつきりと腦裡に浮ぶ、心戰場に寄する慰問の手紙にも

　兵隊サン私達ハ先生ニ引率サレ毎日氏神サマノオ庭ノ御掃除シテ、兵隊サンガ病氣デ死ナナイ樣ニ元氣デ戰ツテ露兵ノ首ヲモツテ歸ヘル樣ニ祈ツテ居マス

　今日モ先生カラ修身ノ時間ニ兵隊サンハ遠イ遠イ寒イ支那ノ國デ、御國ノ爲ニ勇マシク戰ツテ何時モ勝ツテ井ルオ話ヲ聞キマシタ。私達モ大キクナツテ御國ノ爲ニ兵隊サンニナツテ忠義ヲツクシ靖國神社ニマツラレル樣ニナリマス。

御國の爲に奉公し靖國神社に祀らるる。此の一言に感激させられ勇氣百倍した肉彈の將士が出陣の時小學校の一兒童が無我無心で送つた日の丸の旗が三勇士を肉彈とならしめた事を思ふ時、日本魂の植付けは小學校教育にありと云ふ事を決して忘れてはならぬ。其の局に當る者の奮勵努力こそ國運の隆盛を致す所以である。

銃後に叫ぶ婦人の偉大なる力

祖國愛の血潮に燃ゆる愛國婦人達から送られる戰場への慰問袋其の中に入れられた誠心のこもつた慰問の手紙……

　私達は毎日神佛に日參して皆樣の御健康を祈つて居ます。留守中の事は決して心配してはなりません。

　御留守宅の皆樣は私達がきつと御守りして居ります、何の御不自由もなく御過し遊ばされ御年老ひたる御母樣を毎日御勇め申して居ります。小學校にお通ひの御孃さんもそれはそれは御元氣で毎日出征の方々を御見送りに『萬歳々々』と日の丸の旗を振り千切る御元氣さ愛らしさですから御安心あそばしませ。そして病氣で死してはなりませぬ。御國の爲めに勇ましく戰つて花と散り靖國神社に祀りなさりませ。

戰場に在る武夫の心にひゞくは此の手紙の事ばかり攻擊開始の前日に見た慰問の其の手紙勇氣百倍した。萬餘に上る夥しい死傷者有史以來の一大苦戰を重ねた旅順要塞戰全滅に次ぐ全滅、死を賭して決死隊に加はつた突擊の狀態は

元來旅順の要塞は約二丈餘に上る鐵筋コンクリートで堅められ、二十八糎の砲彈もはね返す位堅固なもの我軍の力では微動だにせぬ。しかも我軍は此の城壁を猪突的に躍り込もうと云ふ殊に城壁の前方は蜘蛛の巢の如き鐵條網、强力な電流線地雷火線等が張り廻され之れを切り開くのが我等決死隊の任務である。然るに敵は絶へず嚴重に監視し破礮と知るや亂射亂擊忽ちにして火の海と化す。殘る者は一人もない。此の戰ひで生き殘り痛む傷の苦みに氣の付いた時は野戰病院の天幕の中、後送られて大連から病

院船に乗り込んだ時であつた。『あゝやつと安堵した傷も深し再出征する事もあるまい』と云ふ飛んだ淺ましい考へであつた所が此の唾棄すべき不心得が一瞬にして淸掃された。埠頭には私達戰傷兵をいたはる百餘の愛國婦人會の婦人達が迎えに出て居られる。

私の顏全體が戰地に居た儘で黑血に汚れ餘りにもきたないので、付添の軍醫が此の顏を拭ふ事を婦人會の人に依賴した。その時私の傍に居た五十位の一婦人は俄に擔架の上の私に抱きつきそして土と血に塗れた顏を己の口で吸ひ頰をぴつたりよせ狂人の如く『此の貴い國家の傷兵の顏が拭へよう此の私の口で吸ひ取ります』

思はず私はくらくらと目がまわる樣に感じた。次の瞬間に恐ろしい精神力が突然生じて來た事を覺へた。

『戰場にある時と云ひ今又後送の身の我々兵士を斯く迄思つて居て吳れたのか』とこの一婦人の爲に動かされ熱い熱い感謝の熱淚がはら〳〵とこぼれ、今迄の不心得が忽ち消え倒れては起き、又倒れては行き數回の敵彈を受くる事が出來た嗚呼其の誠心こそ眞に我等を第一線に送り出す偉大なる銃後に叫び銃後に祖國を護る婦人の力である。

乃木將軍の軍裝檢査

戰場で最も恐るゝは敵の逆襲よりも砲彈の炸裂よりも雨と雪である。大陸地方の常として急に雨が降る。亦急に晴れとなる將兵は出陣の際着用した軍服の外何物もない雨に濡れても脫いで干す事は嚴禁である。何時敵の逆襲を受けるかも知れぬ人間の丸干である。二ケ月も經ると臭くなる虱が出來る、痒くて氣持が惡い何とも形容のしかたがない。然し虱が多くなる程臭くも痒くもない慣れて來るのである。此の有樣を知られたのか乃木大將の軍裝の檢査があると言ふ事で將兵は急に虱狩りをする膝の下や股の間を爪で痒くと先きに虱が付いて來る。乃木將軍は親しく此の服裝を御覽になると慈悲心に富んだ親の如く絕へず淚を流されて

『御前達は幸福だ此の虱が多くなる程國家に忠義を多く盡くしたのだ。そして此の軍裝で戰死をする。之れが名譽の戰死者と國民から讚美される。其の惡戰苦鬪の誠心が靖國神社に祀られて護國の柱神として永久に崇敬されるのだ。武士は忍耐が第一だ。善い軍裝だ檢査の結果は萬點だ』と讚美された。其の御胸中を察する度に感謝に燃えたのである。此の服裝で戰死した戰友も亦滿足であつたに違ひない。靖國神社に參拜する時は此の軍裝で戰死した氣持を忘れぬ樣にしたいものである。

乃木將軍の此の慈悲心あらばこそ數萬人の戰友は三十六回の突擊をなし喜こんで旅順要塞と共に炸裂した。而して將軍の死後は乃木神社に祀られて國民から齊しく崇敬されるのである。

上下一致戰友愛
至情の結晶

兵士が入隊する時は中隊は我が家である。中隊の全員は中隊長が父であり、將校が母であり、兵士は兄弟である。一本の煙草も半分づゝ食事も一つの食器から戰場にある此の一家は如何なる時でも全員が死すると云ふ決心だから家庭愛よりも戰友愛の有難味を強く感ずるのである。

兵士は前進を命ぜられるや必ず將校の前に双手を張つて進む。それは將校に敵彈が命中せぬ樣に停止中も前進中も、此の父親や母親を亡くしては一家は全滅せねば成らぬから將校の身邊を防禦して居るのである。將校は亦如何なる危險の場合でも兵士を思ひやり負傷した兵士を背負ふ、兵士も亦將校を背負ふ、戰ひが終る、將校も兵士も中隊の者を心配し合つて居る。

『おゝまだやられなかつたか、元氣だつたか次の戰には一緒に死ぬぞ』と誓ふ、戰死した戰友に抱き付く顔に附いた血と土を拭ふにタオルなく千人針の縫ひ取りを取り出して、顔をぬぐひ頬を付けて吸ひ付く、涙ながら心許りの葬ひをすませ遺骨を箱に納めて最後の別れを惜み乍らも次に自分の遺骨が送らるゝと思ふ時、恰も一家族の如く此の一致の精神こそ御勅諭の五事が如實に表れ涙なくては見られぬ、戰傷の悲壯な中にも深嚴な人間的情味の溢れた情景である。

× × × × ×

敵に背を
向けては死せず

斃れて後已むとは言葉の通である。斃れても尚ほ止まぬのが日本武士道の本領である。戰死者は死する時は必ず『僕の頭を敵の方に向けて呉れ』と目も見えぬ息も苦しい中から敵に背を向けて死する事を此の上もなき不名譽と思つて居る。そして『僕が戰死した時は笑つて死んだと國の親達に知らせて呉れ』と死んで行く後迄も御國の爲に死す事を無上の光榮と自覺して居る。

負傷者は身體の自由を失つても必ず携帶の彈丸を差出してゐる。之れは戰友が彈丸が缺乏してはならぬと自己の殘りの彈丸を前進して居る戰友に渡す。而して自己は銃に劍を着けて死ぬ迄武器は手から離さぬ。自由の許す限り敵に近づいて死にたいと言ふ日本武士道の一念で充ち滿ちてゐるのである。人の誠心は死しても、本分を全うするもので日本軍の强味はこゝに有るのである。

軍旗の尊嚴と
勇氣百倍の突擊

敗走する敵兵を追擊する程人間を通じて愉快な事はない。十數里の路も一日たらずに爆進して日の暮れたのも知らない程である。

然るに旅順要塞と我が第一線とは千五百米突の近距離であつた。此の間を進むには百五十日と三十六回の突擊に數萬の尊き精靈を犧牲にした。要塞は二丈餘の鐵筋コンクリートで堅め其百米の前方には鬪防禦や塹壕や或は强力なる電流線を張り廻し如何に勇敢な我軍も『只死す』と云ふ覺悟あるのみ、戰術も智略も萬策つき全身には水分なく呼吸が詰つて進むに道なく攻むるに術なく進軍喇叭も樂隊も『ぷう』との音も出ない只敵彈に斃るゝを待つばかりであつた。

然るに此の時陣頭に輝いたのが軍旗である。此れぞ我が　天皇陛下御自ら下し給ひし御旗である。則ち此の御旗の輝く所君の御馬前だ。戰場全體が火の海でも水の中でも厭はずと御契ひ申上た。『生死榮辱等考ふる餘地はない。』忽ちにして勇氣百倍し如何なる惡戰苦鬪も打ち忘れ地雷火電流何のその銃劍が折れて後迄も人馬木石の區別なく嵐に枯葉を散らす如く猪突的に躍り込むのも容易である。

『嗚呼君の賜ひし此の御旗を一人々々の肉魂を以つて護れ、行け、國民！武夫此の旗風になびかせて世界の平和と人道に剛勇無雙の武夫が天皇陛下萬歳と熱血湧きてほどばしり、最後の叫び絕ゆるまで肉彈突擊何のその一人も殘らず護れよ』と古賀聯隊長の全滅も御旗尊嚴あればこそ……。

空閑神社の祭主
隱れたる德行家

> 明治天皇御製
>
> おのかためかへり見すして人のため
> 盡すそ人のつとめなりけり

佐賀市出身空閑昇少佐は上海日支事變に於て金澤第九師團步兵第三大隊長として出征し、昭和七年二月十三日江灣鎭の激戰に於て敵前數百メートルの地點に突入し三方より敵の猛射を受け部下に多數の死傷者を出し二晝夜に渉る力戰苦鬪遂に彈丸糧食渴くるも屈せず一步も退却せず、遂に致命的重傷加ふるに出血多量のため人事不省に陷り武運拙く敵の收容する處となり蘇生し初めて驚き軍人の一大不覺なりとし其場に自害せんとするも兇器なく

> 餓の世を唐國人の情にて
> 今日も空しく暮しつるかな

と死期を延ばし三月十六日捕虜返還となり涙を呑んで上海の原隊へ歸り軍法會議にては當時の事情止むを得ず罪を問はずとされたるにも拘らず、帝國軍人として其の間自己の行くべき道を自覺達觀して鄉里肥前の先哲が遺した武士道の訓とも云ふべき『葉隱論語』の精神を體し武人として武士道を踏み自殺を決心し平然として大隊長として爲すべき一切の事務を急ぎ、更に一糸亂れず從容として至れり盡せりの十一通の遺書を關係上官並に遺族に認め『只小官の不注意により』と云ひ一言一句と雖も責任轉嫁や申譯らしき弱音を見せず三月二十八日自己の大隊より多數の戰死者を出した命日を撰びて、林聯隊長と部下の墓前に夫々香花を手向けて生ける空閑少佐としての最後の墓參をなし

あだ花の稔る日もなく寂しくも
散り行く今日ぞあわれなりけり

と辭世を殘して自刄された天晴れの行動は滿洲事變並に上海事變中最大の悲劇にして實に當時天下の耳目を集めたる教訓であつた。現代人が一般に私心に走つて居る際にも特に、天皇陛下直屬の帝國軍人間には犧牲的感念が最も強く體得されて居る證據なりと認むるを得て意を強ふした。當時少佐は靖國神社へ合祠さるるや昇位叙勳等の恩典に浴するやも疑はれて居た時に於て直に之の行動たるや正に神事なりと感銘を深くし只一人默然として、自家の庭内に空閑神社として事變直後奉祠祭典を擧げ朝夕共の偉大さに參拜し敬慕して居る人がある。之の人は現在佐賀市大財町戸上電機製作所に重役として勤めて居られる勝谷辰次郎氏である。勝谷氏は日露戰役當時第三軍乃木將軍の部下として半歳の間難攻不落の旅順攻擊に參加し幾多同胞の死骸を目前に見て自身にも嘗ては決死隊にも志願を申出でた事のあると云ふ痛快なる戰歷を有し金鵄勳章の所有者である。

之の祭主勝谷辰次郎氏に少佐を祭りし感想を問へば

勝谷氏は非常に謙遜して

内盛で祀つてゐる脫線勝の私の守本尊として祀つてゐるのです。誠に恥かしい次第です激戰中に決死隊募集があればどうせ死ぬ身だ、男子の面目上花々しくやれとの勇氣即ち大死一番奉公の決心は立處に出來るものだ。彈丸が命中すれば斃れる迄だ、然し空閑さんの場合に鑑み私にあんな度胸の定つた立派な男らしき最後が出來るだらうか、愈々我が身に引き比べて見れば躊躇いたします。生きんが爲に理屈を見出さんと努力し煩悶します。私の感激はこゝです空閑家には今に尊父あり未亡人あり遺子の三人が居られる。然も聞けば大の子煩惱であつたと云ふではありませんか、人情論や

親子の情誼より之の子達の行方を案ずるとき父としての心中はどんなにあつたでしよう。子を持つ親の心は誰しも同じです然しこゝが修養を積める天晴れの葉隱精神即ち日本精神による判斷

「大義親を滅するの道義心です」

負傷後悠々四十三日目の出來事御氣の毒な程謙遜な死に方です。其遺書を拜讀いたし萬感胸に迫り泣かずには居られません。お互武士の情として御慰めせずには居られません。いや親戚でも知り合でもありませんが共に佐賀人です。共に日本人ですが人間程種類の雑多なものはありません。高潔なる御行動に對しては頭が下ります。百千遍の大衆の說敎よりも空閑さんは一身を捨てゝ國民全体に日本精神を事實の上明かに垂れて下さつたので士氣を鼓舞した事如何程大なるかは計り知れません。誠にありがたい極みです。楠公も偉い、乃木將軍も偉い大西鄉先生も誠に偉いが私は空閑さんも右の方々と御同列に拜して居ます。

上海事變に於て世界人心に大なる衝動を起さしめた空閑少佐の英靈は德行家勝谷辰次郎氏の誠心から建立された神社に永久安き眠りにつかれし事を思ふ時少佐を崇敬すると同時に言實共に博愛德行の勝谷氏の武人としての至情こそ非常時國家を打開し而して御製の御主旨に報ひ奉る行爲なりと贊美する次第である。

古賀聯隊長の壯烈なる最後

身を捨てゝ御旗を守るけなげさは
我が益良男の鑑なりけり

古賀聯隊長は昭和七年一月九日錦西に於ける獰猛なる支那兵との戰鬪で、名譽ある我が軍旗を死守し壯烈なる忠死を遂げられた。

大佐は日露戰役に際しては、將校斥候となり鐵嶺方面に潜入し露軍の行動を偵察し北滿に於ける露軍を脅かし、此の間我が軍に對し重要なる報告を齎し鬼武者として榮譽ある感狀を授けられた。顧ふに大佐は錦西に於ても數十倍の敵に對し奮戰勇鬪胸部に貫通銃創を受けしも敢て意に介せず、挺身陣頭に立ちて部下を激勵し『軍旗の下に行け突撃せよ而して匪賊を徹底的に討伐せよ』と最期にかすれ行く聲を振り絞りつゝ天皇陛下萬歳を絶叫して壯烈なる戰死を遂げた。

是れ畏くも　大元帥陛下の御稜威と我が皇軍の光輝ある榮譽と武士道の精華を發揮せしもので、即ち忠義を以つて固められた大佐が臨終の言葉であつた。大佐は信義厚く儀禮重く慈悲に深く敬神崇祖の念極めて高く、朝夕必ず神佛に禮拜して後就寢するのが例であつたと聞く。此の信仰の念强かりし爲軍神と崇敬される天晴なる行動が出來たのである。如何にも心事の崇高なる葉隱精神の典型の昭和武人の鑑とも謂ふべく後世の龜鑑にして、今や鄕土佐賀市榮の城の趾たる鯱の門下に銅像を建設して大佐の功績を永久に傳へんとしたのは意義深しと謂ふべきである。

昭和の武人古賀大佐が日露大戰に際して第二軍司令官奥大將より授けられた感狀こそは榮城下の銅像と共に永久に武人の教訓として生きたかたみである。

感狀

騎兵第三聯隊
陸軍少兵少尉　古賀傳太郎

右者明治三十七年九月三十日長灘附近出發新民廳西方地區ヨリ遠ク鐵嶺方面ノ敵情及地形ヲ偵察スベキ任務ヲ以テ下士以下十名ヲ率キ大灣附近ヨリ遼河右岸ノ地區ニ進出シ新民廳西北方ニ迂回シテ遠ク前進シ深ク敵中ニ入リ鐵嶺以南遼河河盂狀況及地形ヲ明ニシ時機ヲ失セズ之ヲ報告シ居ルコト實ニ十有八日十月十七日在李大人屯ノ所屬聯隊ニ復歸セリ其間敵騎ノ迫害ヲ受ケルコト四回馬賊ニ遭遇セシコト三回常ニ勇敢機敏ニ處置シ糧食金錢ノ缺乏ヲ意トセズ苦心焦慮百計ヲ盡シテ以テ克ク其任務ヲ達成セリ仍テ感狀ヲ授與シ其武功ヲ表彰ス

明治三十七年十月三十日

第二軍司令官　奥　保　鞏

戰場で負傷した時の心得

我國は國民皆兵である。然も現在の我が國は國を擧げての非常時である。第一線に立つ者は軍人のみに限られては居ない。青年や學生は申迄もなく婦人達に至る迄も第一線に立つべき時期が到來するものと覺悟せねばならぬ。それは我が國民が最後の一人になる迄皇國日本を守ると云ふ傳統的の血潮が流れて居るからである。本書中『荒木大將の竹槍』と題せし處に最後に戰ふ者は武器もなければ訓練もない、只有るものは誠心なりと申述べた。戰場に進む軍人は國家の爲我死すと決心して居る。

然し著者は戰場に臨む時は生死を考へる餘地はない。若し考ふる餘地ありとせば『國家の爲我死せず』と決心してほしい。大楠公が『七度人間に生れて朝敵を滅さん』と此の大訓たるや死して葬儀を濟ませ、又生れ來て二十年を迎へてと謂ふ大楠公の御心ではない。私は一戰爭に於て七回戰場に立てと云ふ遺訓と解釋する者である。それは戰場に在りては重傷者も輕傷者も共瞬間精神は死して居る。後で氣が付き始めて我に還る、即ち精神に於て一度死して居る繃帶して又前進する。或は後送されて入院する。病院では院長以下看護婦に至る迄戰傷兵と云ふので可重な取扱をされる、其の間の嬉しき氣持は言葉には盡せない。此の自由此の優遇を振り切つて退院する。

又出征する、之を七回も續ける。是れが『七度人間に生れて而して朝敵を滅す』のだと私は解釋する。即ち國家の爲我れ死せずと決心したのである。然し決心した許りでは不可能だ。其時の覺悟と處置を述べて見たい。

一、猪突擊に奮戰勇鬪して居た軍人が負傷してからは誠に弱くなる。第一自分一人が負傷しても全軍が破れた樣な氣持になる。

二、輕傷しても重傷の樣に感ずる。

三、負傷すると出征以來夢にも思つて居ない故郷の父母姉妹の事や死した親の事を思ひ出す。此の樣な氣持になるのが人情である。著者は第二回目より左記の樣な氣持になる事を覺悟した。

一、負傷した後に氣がついた時『己れ！露助ヤツタな此の仇を打たずに死すものか』と繃帶を取出して一人で繃帶した。是れから先きは一層强くなる、著者が叫ぶ猪突擊とは猪が一度傷を受けたその勢が猪突擊だ。軍人が繃帶をかけた負傷前の勇氣百倍だ死した氣持の者が又生きた者大にやれる。

二、其場で前進が出來なくても入院しても露助にやられた仇を打たないで許すべきかと考ふるならば病院に居たくない。又行きたくなる否早く退院して又出征する。度重る毎に强くなる戰爭も又上手になる。

一、負傷したら第一に沈着豪膽にして、後退を急いではいけない。然し四五歩後に引く事は最も良い事だ。それは負傷出血を戰友に見せない樣にするためで、多數負傷者を出した場合負傷者の態度が全軍の士氣に關係する事は甚大なるものであるからである。

二、勝ち戰ほど後退を急いではいけない。我軍が前進すれば殘る者は死傷者許りだ。軍が前進すれば安全に後退も出來る。又衛生隊の收容が出來る間待つがよい。

三、要塞戰でも又野戰でも不利の戰況には後退を急ぐと、第二の彈丸でやられる出來得れば其場に

在つて夜間を待つが良い。

四、晝間でも是非後退の必要が生じても敵に脊を向けて後退してはならぬ。後向けに後退するが良い。それは彈丸と云ふものは脊を向けたなら必ず命中する事に決定して居るからで負傷後第二の彈丸を受けては助からない。又助かるとしても脊から彈丸を受けて收容されたら病院で背部の銃創と記入されるから、第二の彈丸だと云ふても理由にならぬ。背部の銃創は日本軍人として最も不名譽である。

五、夜間に退却する時は方向を誤つてはいけない日暮れ方には方向を定めて伏して居る事だ。其方向とは頭を敵の方に足を我が軍の方にそして足の方に後退すれば我が軍の位置に還る事が出來る。

六、夜間後退する時は途中敵味方を論ぜず出合つた時は伏せて動かない。行き過ぎてから又後退する事が必要である。

七、我軍の歩哨線に近づけば伏せの姿勢で歩哨が安心する如く負傷者である事を充分に承知させて、而して歩哨線内に入る、此時歩哨の任務を防害してはならぬ。又歩哨の同情を受けてはならぬ。

八、名譽ある負傷者が歩哨に同情を受け歩哨が其位置を去る樣な事があれば重大である。戰友に對する同情とは斯の如き場合を云ふものではない。

戰場には何を携帶するか

緋縮緬の四五尺を是非携帶する事だ。

それは負傷した時の止血と繃帶の代用にする。此の緋縮緬で腹卷をして行く事が大事だと私は自分の体驗から信じる。軍隊からも繃帶材料は給與されては居るがそれは上衣の左の內下に縫ひ付けてある、負傷して時間が立つと痛みを覺ゆる。取り出す事が困難になつて來る。若し取り出したとしても此の繃帶(三角巾)は塲所に依り其の使用が又困難である。加之激戰の塲合は上衣も何も打捨て輕裝で進む塲合が多い。激戰中は負傷後の手當なんて考へる者は一人もない、故に負傷してからでは間に合ぬ。腹卷にして居れば決して捨てる事はない。

著者が何故に緋縮緬を撰んだかと云ふ事は縮緬は出血の爲縮むから強く締る自然に血が止る、止血法の中にも携帶の三角巾で締めよと言ふけれども、それは實際戰場で負傷せぬ人の云ふ事で痛むから仲々締まるものではない。縮緬ならば輕く締めて居ても出血する程好く締まる故に血が止まる理である。

それならば著者は『何故緋縮緬を撰ぶか』が白い繃帶に血が付くと氣の弱い者は驚く、緋であれば出血しても左程迄思はぬ『戰塲で出血を見て驚くと氣が弱い』と云ふと『軍人が』と笑ふ人が有るかも知れないが軍人も人間である。理論で戰爭は出來ない。著者は國家の爲後進者の爲に必ず有利な事を休驗から自覺して居るから是非戰塲に進む軍人に御傳へして平和の時から御準備してほしいと痛感してゐる。

同情せずに居られぬ淋しい未亡人

國民は津々浦々に至る迄、國を擧げて非常時と叫んで居る。日露戰役三十年を偲ぶ涙ぐましい軍國の美談として、當時歩兵第三聯隊今田三四郎中尉は第一軍に屬し、鎭南浦に上陸斥候長として鴨綠江の流れを押し渡り現在の安奉線蛤蟆塘の戰を初陣に、或は蘭花嶺の偵察に、或は摻子嶺の戰鬪に、常に衆に先んじて前進活躍し其勇往邁進なる行動は部下をして驚倒せしめ軍人の典型であつた。倘貨郎溝附近の重大なる偵察に撰拔され光輝ある唯一の拔群將校として少壯將校より羨まれたが、天運盡きたるや既に重大任務を終へ歸途に就かんとする一刹那、數百餘の敵兵に發見され亂射を浴び、數ヶ所に傷を受けられたが、これに應戰して奮鬪せしに、敵彈又も胸部を貫き、心臟を傷つけ衆寡敵せず加ふるに地形甚だ不利にして殆んど全滅した。

平素氏の慈愛に浴する部下勇卒は身の重傷も打忘れ奮躍して今田中尉を背負ひ身をもつて收容せんとせしも天我に時を與へずして之れを許さず、今は詮方つき今田中尉は最期の切り死を覺悟し、再び敵陣目がけて切り入り浮足立つ露兵の中に太刀振りかざして獅子奮迅の勢で躍り込み花々しく奮鬪をしたが第三彈は今田中尉の腰部を貫き遂に斃れた。此の壯烈なる最期は鬼神をも泣かしむるにたる。中尉が出陣の日詠み遺したる辭世にも

何時見てもけたかく見ゆる富士の山
　いつれ見守れ巳か勤を

生還を期せざる中尉は勇敢にして果斷生死の境に直面して、臥薪嘗膽よく其任務を達成したる狀況は其當時中尉の戰友三浦中尉及武藤從卒により僅に入り細に亘り書き遺されてゐる。

中尉は幼少の時兩親の約束した最愛の妻佐賀市外西船津村岡廣子刀自と、明治三十七年一月正式に華燭の典を擧げた。二月八日には露國に對し戰を布告された、新婚の夢は破られ最愛の妻に別れを惜み、武士の習とは言へ軍服の袖を振り切つて皇師に從つて出征したが之れが中尉の最期であつた。

殘された新婦は中尉の武運長久を祈る外何物も考ふる餘地はなかつた。爲に、婚姻の手續を欵ぎ名譽ある未亡人として優遇を受くる事も出來なかつた。未亡人は當時花恥かしき乙女であり心に最愛の夫として緣したたる黑髮を惜しげもなく切り落し中尉の靈魂に捧げ、英靈は村岡家菩提寺與賀町水月庵に永久に安らけき眠りについた。

刀自は此の名譽ある軍人の妻として、自力更生の道を求めんと上京し産婆看護婦學校に入り優等の成績にて卒業し、貧困の姙産婦等を救助し社會奉仕に努力して居る。人間の眞價は悲慘なる巷に入つて始めて顯はるるものである。或は天を怨み或は人を怨み野卑なる言動を敢てする者漸く增加する時、現代に刀自の如きは身は將校未亡人として優遇を受けざるも英靈の認むる眞の未亡人なりと自覺し、三十年間一日の如く慰靈に餘念なき行動は洵に見あげたる態度である。わけて軍人の妻としてかくありたきものである。村長始め村內有志は刀自を認識し村內慰靈祭には將校遺族として特に御慰め申上げて居る。嗚呼日露戰役の勇士今田三四郎中尉の隱れたる未亡人淋しい刀自こそ廣く婦人の鑑として讃美され欽慕措く能はざる德を備へて居る。

× × × × ×

日蓮上人の靈德我を救ふ

◇……出陣に當り殘し脉む
大君の深き惠みは膄か身の
骨砕くとも肉破るとも

私の祖先は眞宗であつた。亡母は元來日蓮信仰者と申すよりも寧ろ日蓮狂であつた。母は不幸にして早世し最後の一言は『唯日蓮樣に信賴せよ』と私の右手を固く握つて佛故し靈魂は眞宗の菩提寺に安らけく永久に眠りについた。然るに私は當年九歲の少年なるを以つて信仰の道を知らなかつた。其後は幼少の弟妹を慰めて每日每夕亡母の墓參を唯一の樂しみとして日蓮とは亡母の靈魂の如く思ひ且つ深く信じ、幼な心にも母の遺言に從ひ墓前に跪づき『南無妙法蓮華經』と合掌した。

『光陰は矢の如し』とやら徵兵檢査にも合格し日露の國交は斷絕し大戰の火蓋は切つて放たれた。兄は豫備兵として召集され弟は新兵として入營し、私は現役兵として一家から兄弟三人揃つて出陣し同じく旅順の背面に向つた。兄弟二人は微傷だにせず最後迄御奉公申上げる事を得た。私は數回負傷し始より終迄決死隊の一員であつた。全員四十七士の戰友は一人も殘らず旅順要塞と共に炸裂し、一塊の肉も止めず勇ましくも大和櫻花と散り靖國神社に護國の神として祀られ國民より崇拜されてゐる。

私は第五回旅順總攻擊に當り戰友五名及び工兵撰拔兵と協力して東鷄冠山北砲臺の副防備及地雷火や强力なる電流線等を爆破し、突擊隊の前進を容易ならしむる任務を帶び午前一時先づ敵の步哨線に肉迫し、約八十名の哨兵を擊殺し目的の爆破に成功し午前五時迄に通路を開設した。午前六時我が突擊大隊は勇ましく得意の白兵戰を以つて北砲臺の一角を占領し、敵の大部分を全滅せしめたるも友軍他の大隊は目的中途にして全滅し、我が大隊も守備困難に陷り正午十二時を以つて又全滅の止むなきに至り殘る者は幾何も無かつた。

夜に入るを待ち傷兵は後退したるも私は脚部に數彈と左胸部に重傷を負ひ出血甚だしく身體の自由を失し極寒零下三十度の戰場に喰はず吞まずの五日間、全く人事不省何の苦痛も無く只スャ〳〵と眠り假死情態をつゞけた。敵兵は數回となく來ては身體を轉がし軍服及銃劍等を持去つた。其間絕間なく眠る私を『起きよ起きよ』と身邊に付き添ひて起す者がある。之れは亡母の靈魂であつた。最後に靈魂は白布に包める卷物を私に與へ之れを大切に所持せよと命じた。其の卷物を見れば、それは母が臨終迄枕頭を放さなかつた母の遺物日蓮聖人の御肖像であつた。有難く感謝し御肖像を卷き修め白布に包み、双手に全力を盡し握り締めたと思つた時、私は假死の情態から我れに歸り、私が握り締めて卷物と思つたのは卷物にあらずして、以外！戰友軍曹岡村長三郎君が重大なる斥候の任務を帶び進路を誤つて北砲臺下道を迷つて來て私の右手を踏んだ、私が卷物と思つて握つたのは軍曹の左足であつた。軍曹も驚いて直ちに私を背負ひ步哨線迄後送してくれた此の極寒此の重傷に喰はず吞まず五日間極寒零下三十度の雪の荒野に曝され奇蹟的にも九死に一生を得た、私のこの九死に一生は全く日蓮聖人の御靈德と亡母の靈魂とが軍曹を導きて救はしめたのであつたと思つた時、今は亡き母上、そして日蓮上人の加護に泣いて感謝した靈德なしと疑つてはならぬ。必ずや皇軍の背後には神佛の靈德が加護して居るのである。

然かも全身麻痺した私が軍曹の左足を握り締めた、之れは私の意識にあらずして靈德の偉大なる力である

と謂はねばならない。

嗚呼我が日本國は神國であり、我が國民は神の子であり此の神德を授け給ふは信仰の力であると私は深く信じ、私は只無心に信仰の世界を憧れ、そして朝夕の禮拜に一日を感恩の生活に暮らしてゐる。

昭和十一年三月二十日印刷
昭和十一年三月廿五日發行

【非賣品】

版權
所有
著者

著作兼發行人　澤近德彌
佐賀市水ヶ江町十間端一七一

印刷人　執行豊治
佐賀市六座町二六

印刷所　東文堂印刷所
佐賀市六座町二六

發行所　帝國傷痍軍人會佐賀縣支部
佐賀市水ヶ江町十間端一七一

終